日田市

PRINTED WITH SOY INK
Trademark of American Soybean Association

赤迫遺跡 -B～F区の報告-

日田市埋蔵文化財調査報告書第130集

2017年

日田市教育委員会

日田市埋蔵文化財調査報告書第130集

赤　迫　遺　跡

-B～F区の報告-

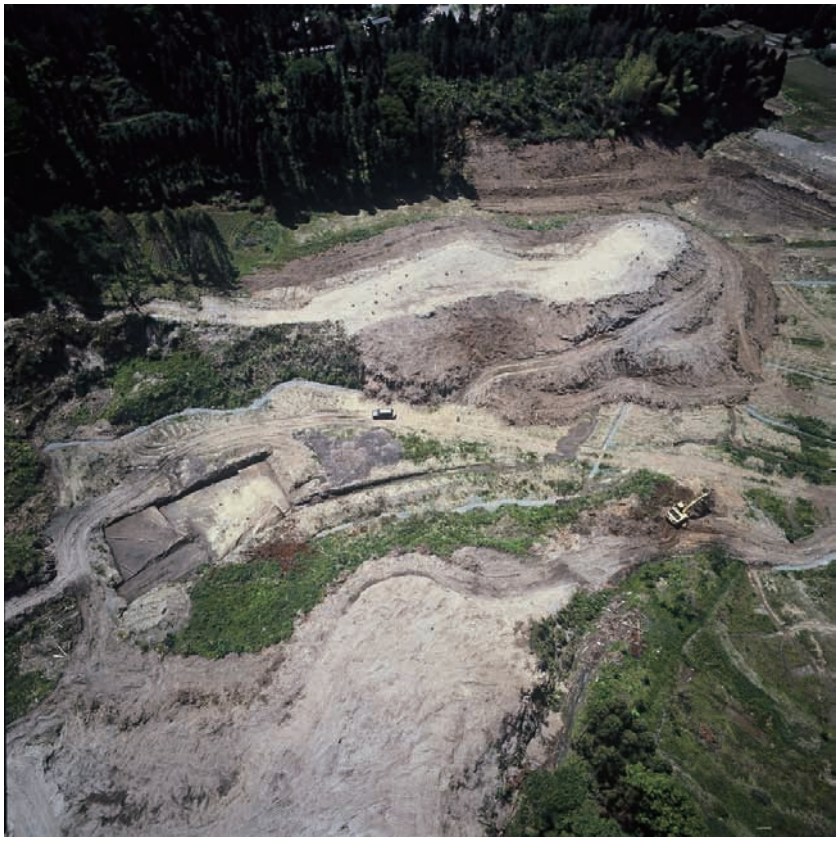
2017年
日田市教育委員会

赤迫遺跡全景（南から）

Ｂ区全景（西から）

B 区全景（真上から）

B 区 1 号土坑墓（西から）



E・F 区全景（東から）

F 区全景（真上から）

序　　文

昭和50年代、国民の経済的豊かさは高度成長期ほどではないにしても向上を続け、週休2日制の普及に伴って余暇の時間が増えるとともに、その有効利用に対する意識が芽生えつつありました。余暇の過ごし方のひとつとしてスポーツを楽しむ人が増え、これに対応するために、市のシンボル的公園として大原総合運動公園の建設事業がはじまりました。

この報告書は、当委員会が平成5・6年度に大原総合運動公園整備事業に伴って発掘調査を行った赤迫遺跡A～F区のうち、B～F区の調査内容をまとめたものです。

調査では、古墳時代や中～近世の墳墓群、中世のピット群やため池状遺構などが確認され、人々が古くから地形をうまく利用していたことが明らかとなりました。

こうした発掘調査の成果をまとめた本書が、今後、文化財の保護や普及啓発、地元である田島・城内地区の歴史を知る手掛かりのひとつとして、また、学術研究等にご活用いただければ幸いです。

最後に、調査に対するご理解や様々なご協力を賜りました関係者のみなさま、酷暑極寒のなか作業にご尽力いただきました作業員のみなさま、そして発掘調査をあたたかく見守っていただきました地元の皆様に、心より厚くお礼を申し上げます。

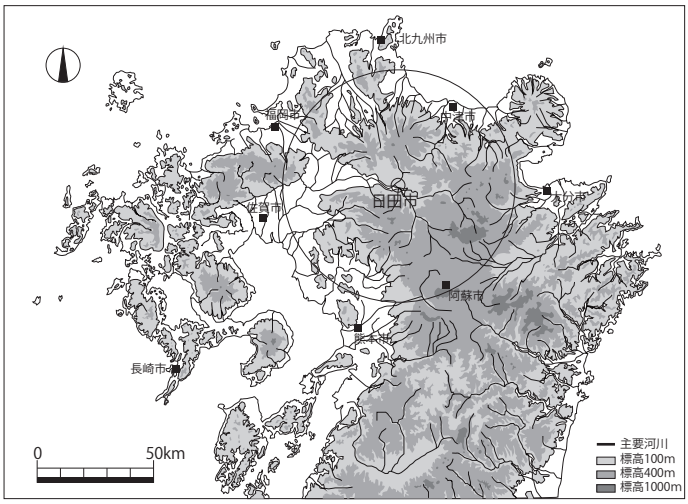
平成29年3月

日田市教育委員会

教育長　三　笘　眞　治　郎

例　　言

1. 本書は、平成5･6年度に市教育委員会が実施した赤迫遺跡B～F区の発掘調査報告書である。A区については、別途刊行予定である。
2. 調査は大原総合運動公園整備事業（事業主管課：建設部都市計画課）に伴い、日田市教育委員会が事業主体となり実施した。
3. 調査にあたっては、事業主管課および地元の方々にさまざまなご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。
4. 調査現場での遺構実測は、調査担当者のほか、土居・森山・五島（発掘作業員）が行った。
5. 調査現場での写真撮影は、調査担当者が行った。
6. 本書に掲載した遺物実測図は調査担当者が作成し、製図は雅企画有限会社に委託した成果品を使用した。遺構製図は報告書担当のほか、若杉・上原・用松（整理作業員）が行った。遺構以外の図面作成については、渡邉の協力を得た。
7. 本書に掲載した遺物写真は雅企画有限会社に撮影を委託し、その成果品を使用した。
8. 空中写真撮影は株式会社スカイサーベイに委託し、その成果品を使用した。
9. 挿図中の方位は全て磁北で示している。
10. B区横穴墓の個別図のレベルについては、実測図から基準高を読み取ることができなかったため、図面に記載された数値のままとしている。
11. B・C区から出土した人骨および獣骨の分析は行っていない。
12. 写真図版の遺物に付した番号は、挿図番号に対応する。
13. 出土遺物および図面・写真類は、日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
14. 本書の執筆・編集は、行時桂子が担当した。



日田市の位置

大分県の行政地図

本 文 目 次

Ⅰ　調査の経過 …… 1

Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 4

Ⅲ　調査の内容 …… 6
(1) 調査の概要 …… 6
(2) B 区の遺構と遺物 …… 6
　1. 横穴墓 …… 6
　2. 土坑墓 …… 14
(3) C 区の遺構と遺物 …… 19
(4) D 区の遺構と遺物 …… 19
(5) E 区の遺構と遺物 …… 19
(6) F 区の遺構と遺物 …… 24

Ⅳ　総括 …… 24

挿 図 目 次

第 1 図　遺跡位置図（1/15,000） …… 2
第 2 図　調査区配置図（1/2,000） …… 3
第 3 図　周辺遺跡分布図（1/15,000） …… 5
第 4 図　B 区遺構配置図（1/400） …… 7
第 5 図　B 区 1 号横穴墓・出土遺物実測図（1/40・1/2） …… 8
第 6 図　B 区 2 号横穴墓・出土遺物実測図（1/40・1/2） …… 9
第 7 図　B 区 3 号横穴墓実測図（1/40） …… 11
第 8 図　B 区 4 号横穴墓・出土遺物実測図（1/40・1/2） …… 12
第 9 図　B 区 1・3 号土坑墓・出土遺物実測図（1/30・1/4・1/2） …… 13
第 10 図　B 区 2・4 号土坑墓・出土遺物実測図（1/30・1/2） …… 15
第 11 図　B 区 5・6 号土坑墓実測図（1/30） …… 17
第 12 図　B 区 7 ～ 10 号土坑墓・出土遺物実測図（1/30・1/4） …… 18
第 13 図　C 区遺構配置図（1/200） …… 20
第 14 図　C 区土坑実測図（1/40） …… 21
第 15 図　D 区遺構配置図（1/200） …… 21
第 16 図　E 区遺構配置図・土坑墓実測図（1/500・1/30） …… 22
第 17 図　F 区遺構配置図・ため池状遺構土層図（1/200・1/100） …… 23

写真図版目次

巻頭写真図版１　赤迫遺跡全景（南から）／ B 区全景（西から）
巻頭写真図版２　B 区全景（真上から）／ B 区 1 号土坑墓（真上から）
巻頭写真図版３　E・F 区全景（東から）／ F 区全景（南から）
写真図版１　B 区全景（真上から）／ B 区全景（南から）
写真図版２　B 区東半（3・4・1 号横穴墓）／ B 区西半（2 号横穴墓）
写真図版３　①B 区 1 号横穴墓（真上から）／②B 区 1 号横穴墓刀子出土状況／③B 区号横穴墓鉄鏃出土状況
④B 区 2 号横穴墓（真上から）／ ⑤B 区 2 号横穴墓閉塞石検出状況／⑥B 区 2 号横穴墓玄室
⑦B 区 2 号横穴墓遺物／⑧人骨出土状況 /B 区 2 号横穴墓刀子出土状況
写真図版４　①B 区 3 号横穴墓検出状況（南から）／②B 区 3 号横穴墓（真上から）
③B 区 3 号横穴墓閉塞石検出状況／④B 区横穴墓閉塞石除去状況／⑤ B 区 3 号横穴墓玄室
⑥B 区 4 号横穴墓（真上から）／⑦B 区 4 号横穴墓玄室／⑧B 区 4 号横穴墓閉塞石検出状況
写真図版５　①B 区 4 号横穴墓玄室　刀子検出状況／②B 区 1 号土坑墓（南東から）
③B 区 1 号土坑墓（北東から）／④B 区 1 号土坑墓遺物出土状況
⑤B 区 2 号土坑墓蓋石検出状況（南西から）／⑥B 区 2 号土坑墓（真上から）
⑦B 区 2 号土坑墓鉄鏃出土状況／⑧B 区 3 号土坑墓（南から）
写真図版６　①B 区 4 号土坑墓（北から）／②B 区 5 号土坑墓（北から）／③B 区 6 号土坑墓（南から）
④B 区 7 号土坑墓（南東から）／⑤B 区 8 号土坑墓（南から）／⑥B 区 9 号土坑墓（北から）
⑦C 区全景（北東から）／⑧C 区土坑（東から）
写真図版７　①D 区全景（北から）／②D 区ピット群（北から）／③E 区調査前風景（東から）
④E 区全景（西から）／⑤E 区土坑墓周辺地形（西から）／⑥E 区土坑墓（北東から）
⑦E 区土坑墓（北西から）／⑧E 区土坑墓土層
写真図版８　①E 区土坑墓完掘状況①／②E 区土坑墓完掘状況②／③E・F 区近景（東から）
④F 区全景（西から）／⑤F 区全景（南東から）／⑥F 区全景（北西から）
⑦F 区 1 号溝（南から）／⑧F 区ため池状遺構
写真図版９　①F 区ため池状遺構土層①／②F 区ため池状遺構土層②
出土遺物

本文写真目次

写真１　F 区作業風景 …… 25

表　目　次

第１表　鉄製品観察表 …… 25

Ⅰ　調査の経過

赤迫遺跡は、大原総合運動公園整備事業に伴って調査された遺跡である。

大原総合運動公園整備事業は、カルチャーパークを兼ね備えたスポーツの活動拠点となるシンボル的公園として昭和54年に事業認可を受け、各種競技施設の整備を図り、スポーツ・レクリェーション・憩いの場として、市民はもとより広域的な利用に供されることを目的に着手された。事業は第1期計画と第2期計画からなり、第1期計画の総合体育館とテニスコートの整備は平成3年度で終了し、引き続き平成4年度から10年度までの事業期間で、第2期計画として陸上競技場を中心とした整備が実施されることとなった。平成4年6月18日付で博物館から市各課所に次年度事業の照会を行ったところ、市都市計画課より上記事業が平成5年度から予定されている旨の回答があり、これを受けた博物館からは、対象地が丸尾神社古墳に近接し大規模事業であることから、試掘調査の必要がある旨を回答し、試掘調査の実施に向けて調整を開始した。試掘調査は平成5年9月16～27日に実施した。事業面積約90,000㎡に対して約1,500㎡の調査を行い､6か所で遺跡の存在が確認され、A～F区とした。遺跡の保存について都市計画課と協議を行ったが、丘陵を大規模に削平し谷を埋める工事であることから遺跡の現状保存は困難と判断し、6か所全てを対象に発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は削平対象となっているため工事を急ぐE・F区から着手した。調査は平成6年2月24日～3月30日に行い、引き続きA～D区の調査を4月12日～11月5日に実施した。調査面積は6か所あわせて約8,881㎡である。整理作業を平成6・7年度に、また委託業務等を平成9年度まで実施したものの、A区で多数出土した木製品の保存処理に時間を要した等の事情により事業終了までに報告書の刊行を完了することができなかった。そこで平成26～28年度に市単独事業による報告書作成事業の対象とし、整理作業や委託業務を実施し、報告書作成を行うこととなった。現地での発掘調査に関する日誌は以下のとおりである。

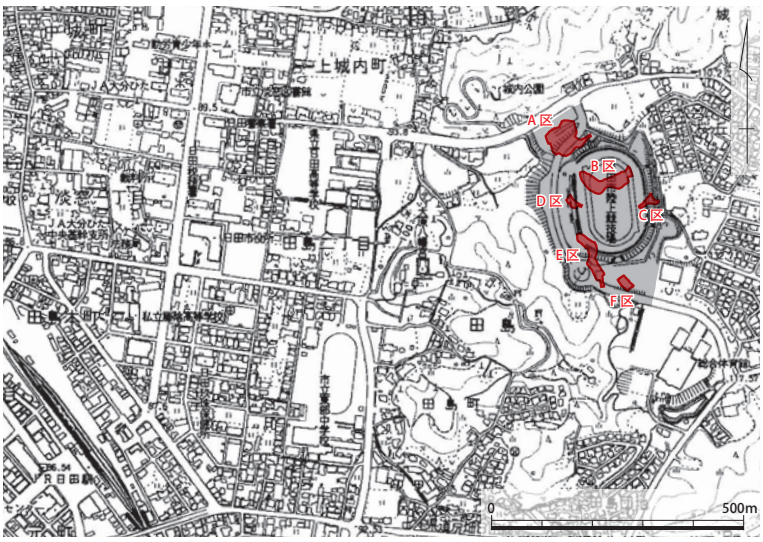
平成6年2月24日　重機および作業員による発掘調査作業開始（E・F区）
平成6年4月12日　重機および作業員による発掘調査作業開始（A～D区）
4月25日　調査指導　宮内克己氏（大分県教育委員会文化課主査）
5月12日　　E・F区空撮
～A区の調査で下駄をはじめとする木製品が多数出土～
8月10日　　A区空撮
9月16・17日　調査指導　賀川光夫氏（別府大学教授）・清水宗昭氏（大分県教育委員会文化課主幹）
10月17日　B区空撮
10月19・20日　調査指導　後藤宗俊氏（別府大学教授）
10月29・30日　調査指導　小田富士雄氏（福岡大学教授）
11月5日　機材撤収、調査終了

発掘調査の関係者は以下のとおりである。（職名・所属名は当時のまま）
平成5・6・7年度／発掘調査・整理作業、平成9年度／委託業務
調査主体　　日田市教育委員会
調査責任者　加藤正俊（日田市教育委員会教育長）
調査指導　　小田富士雄（福岡大学教授）、賀川光夫（別府大学教授）、後藤宗俊（別府大学教授）
渋谷忠章（大分県教育委員会文化課主幹）、清水宗昭（大分県教育委員会文化課主幹）
高橋　徹（大分市歴史資料館主幹）、宮内克己（大分県教育委員会文化課主査）
畑中健一（北九州大学教授）

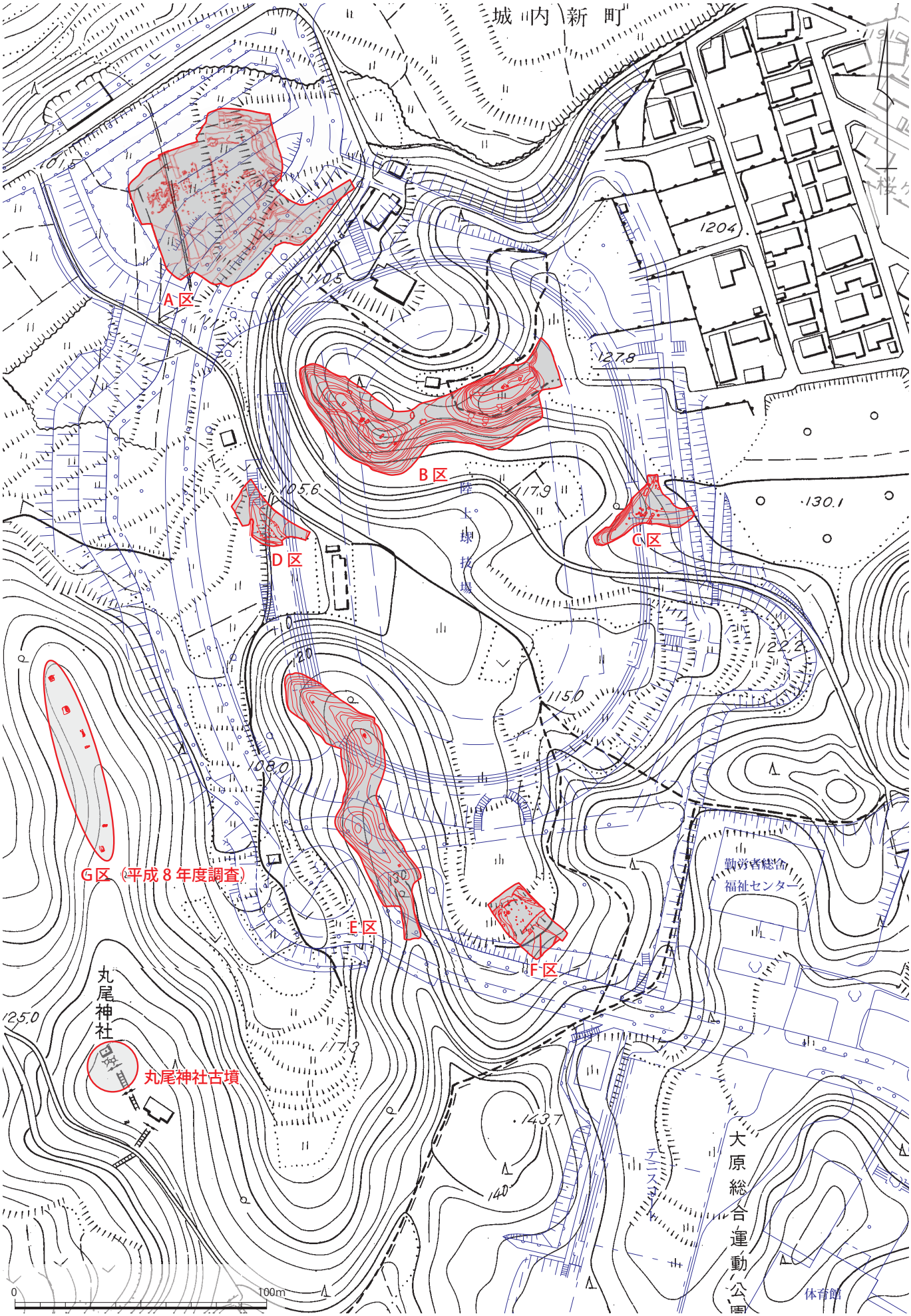
調査統括　原田良伸（日田市立博物館長 /5 年度、日田市教育委員会文化課長 /6・7 年度）
原田俊隆（日田市教育委員会文化課長 /9 年度）
調査事務　阿部正義（博物館次長 /5 年度）、財津寅日出（文化課課長補佐兼文化財係長 /6・7 年度）、
長尾幸夫（文化課課長補佐兼文化財係長 /9 年度）、森山一宏（文化課主任 /9 年度）
羽野恭子（博物館臨時職員 /5 年度、文化課臨時職員 /6 年度）
調査担当　行時志郎（博物館学芸員 /5 年度、文化課主事 /6・7 年度、同主任 /9 年度）
松下桂子（文化課主事補 /6・7 年度、同主事 /9 年度）
調査員　土居和幸（博物館学芸員 /5 年度、文化課主任 /6・7・9 年度）
吉田博嗣（文化課主任 /9 年度）、永田裕久（文化課主事補 /7・9 年度）
森山敬一郎（博物館嘱託職員 /5 年度、文化課嘱託職員 /6・7 年度）
発掘作業員　秋ヤエ子、秋吉ミユキ、浅木フミ子、諫山三代子、石井寿一、石井ツヤ子、石井トモ子、石橋尚子、一井節子、一ノ宮八千代、伊藤勝義、井上秋吉、井上ノブエ、宇佐伊知夫、江藤勝義、江藤キミ子、大関　朗、小埜和美、加納健作、蒲地サチエ、北澤幾子、木薮ふみ、久住猛雄、桑野チヅエ、桑野芙美、江田昭雪、五島英司、五反田香苗、五反田静子、財津利枝、酒井光敏、坂元　登、貞清信子、佐藤カスミ、佐藤勝一、佐藤洋子、清水忠造、庄内武子、園田光子、高瀬茂晴、高瀬八千代、鷹野百合子、高村次男、田中　舜、中野カズエ、中野ヨシ子、橋本益雄、長谷部喜吉、浜田アキエ、浜田文義、浜地幹造、平川五男、平川　敏、広瀬正美、保坂真千子、松本佳世子、松本ミツ子、三苫ツギヨ、毛利十四男、森山好美、柚木ユキエ、行村　豊、横尾久喜、渡辺芳五郎
整理作業員　井上正隆、大城徹也、小埜和美、金城健太、木薮ふみ、田尻義了、羽野恭子、保坂真千子

平成 26・27・28 年度／整理作業・委託業務・報告書作成
調査主体　日田市教育委員会
調査責任者　合原多賀雄（日田市教育委員会教育長 / ～ 26 年 6 月）
三笘眞治郎（　同　/26 年 7 月～）
調査統括　財津俊一（日田市教育庁文化財保護課長 /26 年度）
柴尾健二（　同　/27 年度）
池田寿生（　同　/28 年度）
調査事務　園田恭一郎
（同課埋蔵文化財係長 /26 年度、同課主幹（埋蔵文化財係担当 / ～ 27 年 9 月）
古賀信一
（同主幹 /27 年 10 月～）
若杉竜太（同主査）
渡邉隆行（同主査）
上原翔平（同主任）
報告書作成担当　行時桂子（同主査）
整理作業員　伊藤一美、黒木千鶴子、髙瀬真奈美、高田美保、武石和美、立川幸子、用松　操、安元百合、吉田里美

写真 1　F 区作業風景



第 1 図　遺跡位置図（1/15,000）



第２図　調査区位置図（1/2,000）

Ⅱ　遺跡の立地と環境（第１～３図）

日田市は大分県西部に位置し、西は福岡県、南は熊本県と接する。また、日田市街地の中心部を流れる三隈川（日田市内で大山川と玖珠川の合流点より下流、夜明地区付近より上流にあたる部分の筑後川の別称）は阿蘇を源流とする大山川に数多くの小河川が合流しながら日田盆地に至り、その後は下流に向かって流域面積を広げながら福岡県・佐賀県を経て有明海に注ぐ。

日田盆地は地形的には、概ね上流は大山川・玖珠川の合流点付近から、下流は三隈川・大肥川の合流点付近にあたる。三隈川・大肥川合流点付近では市内で標高がもっとも低く約 65 m、市街地が広がる盆地中心部の沖積地では約 75 ～ 90 mを測る。この沖積地の周囲には阿蘇 4 火砕流堆積物により形成された標高約 150 mの溶岩台地がめぐり、その外周に標高約 200 ～ 600 mの耶馬渓溶岩台地が、さらにその外周には 700 ～ 1,000 m級の山々が連なって市の境界域となっている。盆地内を少し詳しく見てみると、阿蘇 4 火砕流の台地は小河川の浸食作用により分断されてはいるものの、概ねどの地域でも畑としての利用が多く、各地の地名をとって「〇〇原（はる）」と呼ばれる。また、盆地底部となる沖積地では月隈山・日隈山・星隈山などの小さな丘が点在しているが、これらは河川の浸食により阿蘇 4 火砕流や耶馬渓溶岩が残って形成された残丘である。

こうした地形によって形成される日田盆地において、今回報告する赤迫遺跡は、盆地東部の中尾原台地南端付近から派生し舌状に延びる標高約 123 ～ 132 mの尾根上およびその眼下に複雑に入り組む標高約 106 ～ 122 mの谷に位置している。今回の調査地に隣接する赤迫遺跡 G 区では植林作業中に遺跡の存在が確認され、中尾原台地から派生した別の丘陵尾根部分では、石蓋土坑墓 6 基からなる 5 世紀前半～ 6 世紀中頃の墳墓群が調査されている。

次に周辺を時代順に概観してみる。日田盆地では旧石器時代の遺跡はほとんど確認されていないが、馬形遺跡（33）で三稜尖頭器が出土しており、盆地を囲む山などではこのころから人が生活していたものと思われる。縄文時代についても状況はほぼ同様であるが、中尾原遺跡（11）では縄文土器の小破片が数点見つかっている。また最近の調査では、赤迫遺跡から南に丘陵を挟んだ上井手遺跡（26）で大量の縄文土器や石器が出土しており、住居跡などは確認できなかったものの、付近に大規模な縄文時代の集落が存在した可能性が示唆されている。

弥生時代になると、日田盆地では阿蘇 4 火砕流の台地上で爆発的に遺跡数が増加する。赤迫遺跡の周辺では、佐寺原遺跡（10）・元宮遺跡（28）などがこれにあたる。また赤迫遺跡からひとつ南の谷の沖積地にある会所宮遺跡（19）でも中期の円形住居や中期から古墳時代後期の溝などが確認されており、このころには台地上から台地裾部を生活域として利用できるようになったようである。

古墳時代の遺跡はこのあたりには多く見られる。墳墓としては丸山古墳（8 ／市史跡）・薬師堂山古墳（14 ／県史跡）・丸尾古墳（18 ／市史跡）・丸尾神社古墳（17）・田島古墳（20）・鳥羽塚古墳（21）・会所山古墳（22）・法恩寺山古墳群（27 ／国史跡）など枚挙にいとまがない。対して集落跡は付近には見られず、丘陵を東に隔てた求来里・有田地区で確認されており、尾漕遺跡（12）・金田遺跡（39）などがある。

古代になると、赤迫遺跡から谷を少し下った沖積地にある大波羅遺跡（13）で大型掘立柱建物や方形掘り方を持つ大きな柱穴列が見られ、官衙的性格をもつものと目されている。さらに大波羅遺跡の北に隣接する慈眼山遺跡（6）でも古代の井戸や『林』『門』銘の墨書土器が確認されており、盆地底の東端にあたるこの付近一帯が古代の中心地であったことがうかがえる。

中世には大蔵氏が慈眼山に城をつくって本拠地とし、その麓に居を構えたとされる。実際に慈眼山には大蔵古城（7）として曲輪や土塁・横堀などが残っており、その麓にあたる慈眼山遺跡では武士階級の屋敷地と見られる建物跡や区画溝などが確認されている。15 世紀中頃に大蔵姓日田氏、16 世紀中頃に大友姓日田氏が断絶した後は一族・郎従から選ばれた 8 氏により盆地が支配されるが、その中のひとつ、堤氏が居城とした堤城（15）が、赤迫遺跡の北の丘陵上にある。

≪参考文献≫『日田市史』日田市　1990　ほか日田市教育委員会および大分県教育委員会発行の関係遺跡報告書など

1	赤迫遺跡	7	大蔵古城跡	13	大波羅遺跡	19	会所宮遺跡	25	柳ノ本遺跡	31	東寺原遺跡	37	倉迫遺跡
2	永山城跡・月隈横穴群	8	丸山古墳	14	薬師堂山古墳	20	田島古墳	26	上井手遺跡	32	森ノ元遺跡	38	小西遺跡
3	永山布政所跡	9	夕田横穴墓群	15	堤城跡	21	鳥羽塚古墳	27	法恩寺山古墳群	33	馬形遺跡	39	金田遺跡
4	城下町遺跡	10	佐寺原遺跡	16	湯尻遺跡	22	会所山古墳	28	元宮遺跡	34	ガニタ３号墳	40	古金遺跡
5	日田条里遺跡	11	中尾原遺跡	17	丸尾神社古墳	23	会所山遺跡	29	平松遺跡	35	ガニタ２号墳		
6	慈眼山遺跡	12	尾漕遺跡	18	丸尾古墳	24	入龍遺跡	30	日高遺跡	36	ガニタ１号墳		

第３図　周辺遺跡分布図（1/15,000）

Ⅲ　調査の内容

（１）調査の概要（第２図）

事業対象地は複数に分岐した小規模な舌状丘陵とその間に形成された小さな谷で構成されていた。舌状丘陵はほぼ全体に植林が施されており、一部には市の葬斎場も含まれ、谷部は水田として利用されていた。予備調査の結果、調査区北側の市道沿いの谷部（A 区）・東側の舌状丘陵上（B・C 区）・その下に広がる小谷（D 区）・南側の舌状丘陵上（E 区）・その下の小谷（F 区）で遺跡の存在が確認され、本調査は南側のE・F 区から着手、引き続きC・D 区、A 区、B 区と調査を進め、今回報告するB ～F 区では、主に古墳時代・近世の墳墓群や水田開発に関連する遺構などが確認された。

以下、調査区ごとに検出された遺構および出土遺物の説明を行う。

（２）B 区の遺構と遺物（第４図）

事業予定範囲の中央やや北寄り、東の丘陵から西に突き出た舌状丘陵の２つの頂部を中心とする。調査区は東西約 100 m、南北約 45 mを測り、20 ～ 30㎝の表土の下から凝灰岩の地山に掘り込まれた横穴墓４基・土坑墓 10 基が確認された。調査面積は 2,477 ㎡である。

1. 横穴墓

Ｂ区を構成する２つの丘陵のうち、西側の丘陵頂部からやや下がった南に面する斜面で１基、東側の丘陵頂部からやや下がった南に面する斜面で３基の計４基が検出された。いずれも前庭部の残存状況は短く、墓道やテラス状遺構は存在しなかったと思われる。

1 号横穴墓（第５図）

東側丘陵斜面で確認された、南方向に開口する横穴墓である。標高は 130 m前後である。全長約 2.9 m、玄室主軸方向はN 11°Wである。羨門から玄室にかけての天井部は崩落している。

前庭部は長さ約 1.06 m、最大幅約 1.32 mを測り、羨道部に向かって広がる平面形を呈している。前庭部床面は南端から一旦 15 ㎝ほど下がり、羨門前で若干高くなる。羨門の床面には、本来閉塞石が嵌っていたものと思われる掘り込みが見られる。閉塞石はこの掘り込みからややずれた状態で検出されている。閉塞石には凝灰岩の板石が１枚使用されている。羨門部は幅約 0.4 m、残存高約 0.56 mを測る。

羨道は床面で長さ約 0.35 m､幅約 0.41 mを測る。羨道中央あたりから玄門･玄室に向かって 10 ㎝ほど下がる。玄門部は幅約 0.63 m、残存高約 0.76 mを測る。

玄室は床面で裾部幅約 1.82 m、中央部幅約 1.82 m、奥壁幅約 1.74 m、奥行約 1.38 mの、横幅の広い長方形を呈する。床面には敷石や排水溝・壁周溝等は見られない。天井部崩落のため天井高は不明であるが、壁面の残存高は約 0.95 mを測り、奥壁の形状から、天井はドーム形であったと思われる。

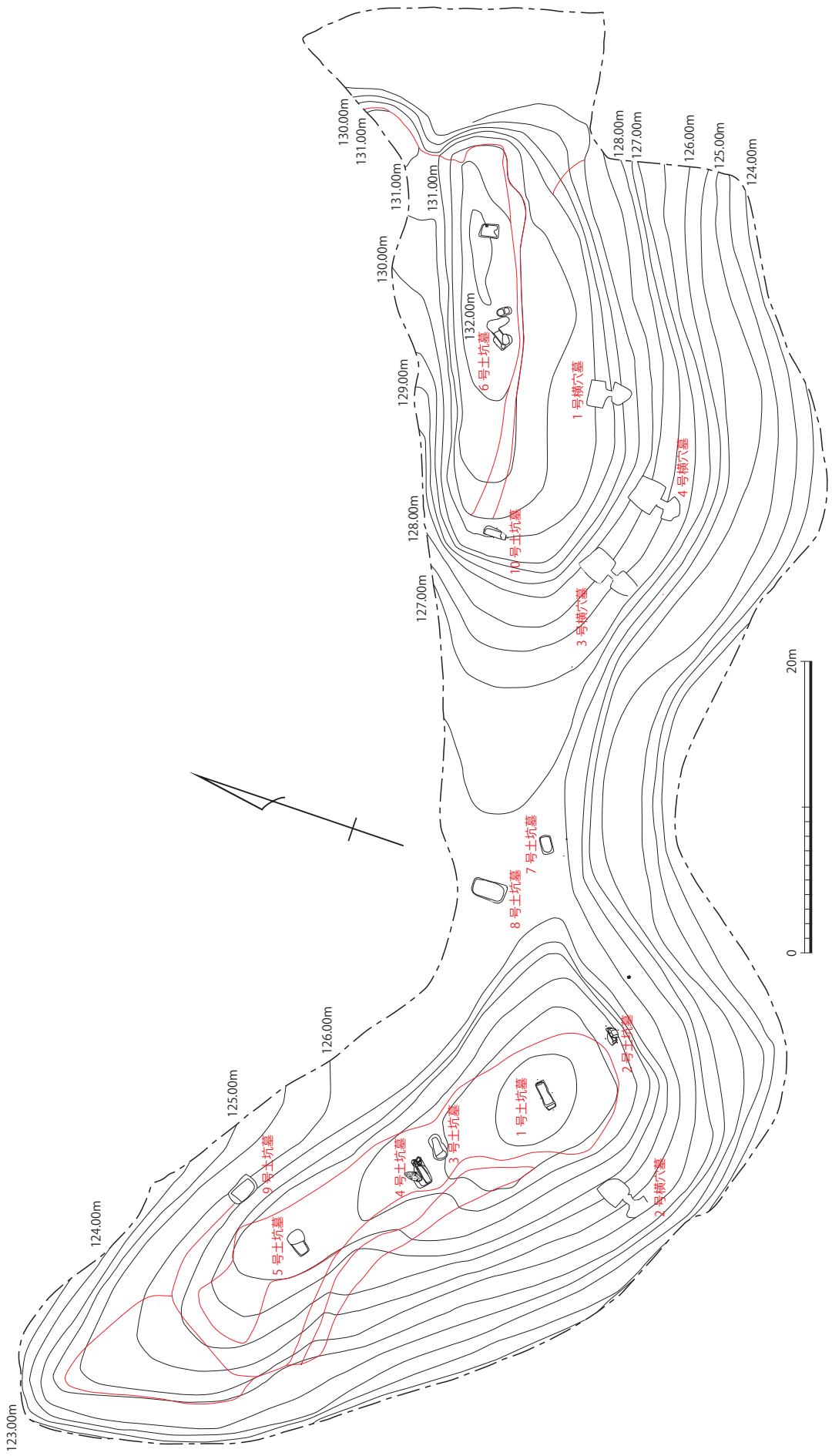
玄室内、左壁側やや手前で刀子１本、奥壁隅付近で鉄鏃２点が検出された。人骨等は残存していなかった。

出土遺物（第５図）

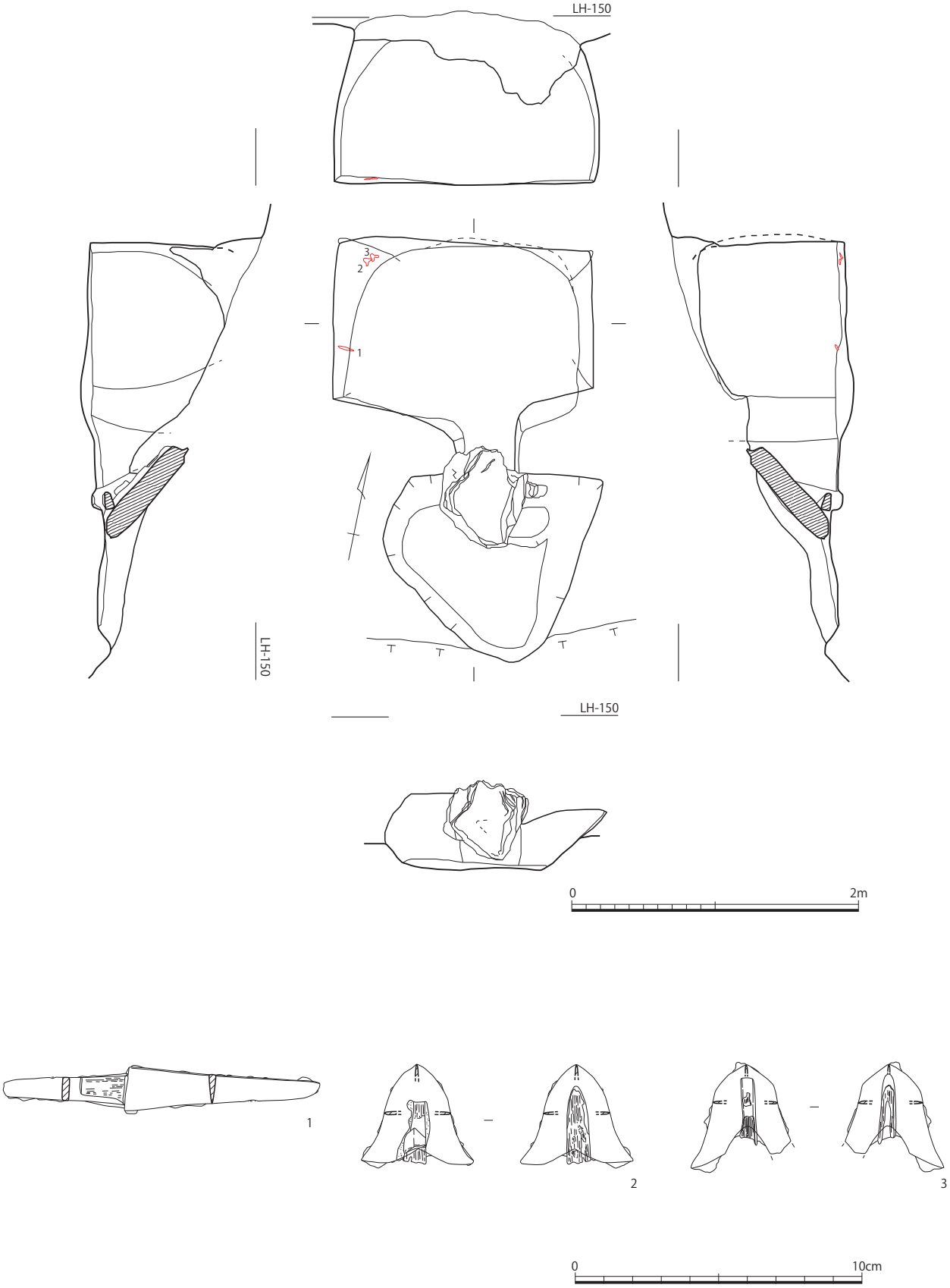
1 は刀子である。完形で茎部に木質が残存している。2･3 は鉄鏃である。2 は完形であり､3 は一方の脚部を欠く。いずれも無頸鏃で、茎部に木質が残存している。2 に比べて 3 は抉りが深い。

2 号横穴墓（第６図）

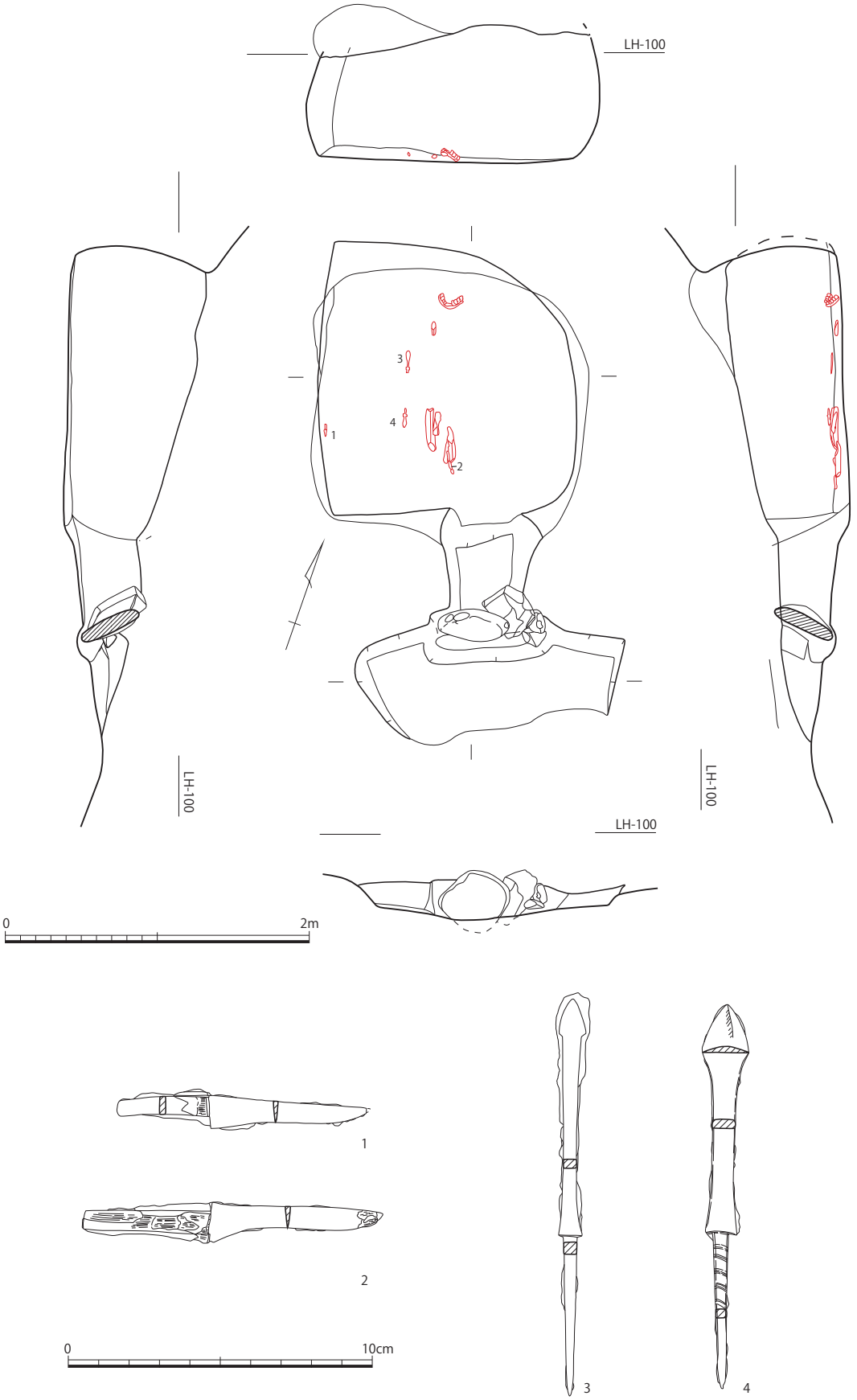
西側丘陵斜面で確認された、南西方向に開口する横穴墓である。標高は 126 m前後である。全長約 3.3 m、玄室主軸方向はN 19°Wである。羨門から玄室にかけての天井部は崩落している。



第 4 図　B 区遺構配置図（1/400）



第５図　Ｂ区１号横穴墓・出土遺物実測図（1/40・1/2）



第 6 図　B 区 2 号横穴墓・出土遺物実測図（1/40・1/2）

前庭部は長さ約 0.53 m、最大幅約 1.75 mを測り、羨道部に向かって広がる平面形を呈している。前庭部床面はほぼ平坦である。羨門の床面には、閉塞石を嵌め込むための掘り込みが見られ、閉塞石はほぼ原位置を保っているようである。閉塞石には扁平な川原石と複数の凝灰岩が使用されている。羨門部は幅約 0.48 m、残存高約 0.32 mを測る。

羨道は床面で長さ約 0.72 m、幅約 0.67 mを測る。羨道中央あたりから玄門・玄室に向かって 5 ㎝ほど下がる。玄門部は幅約 0.64 m、残存高約 0.5 mを測る。

玄室は床面で裾部幅約 1.52 m、中央部幅約 1.69 m、奥壁幅約 1.32 m、奥行約 1.84 mとやや奥に長く、平面形は左半は方形を意識しつつも、右半は隅を明確に設けない不定形を呈する。床面には敷石や排水溝・壁周溝等は見られない。天井部崩落のため天井高は不明であるが、壁面の残存高は約 0.75 mを測り、奥壁の形状から、天井はドーム形であったと思われる。

玄室内中央部で 1 体分と思われる下顎や下肢骨が検出され、その西側そば（人骨の右側）で鉄鏃 2 本、左壁側やや手前で刀子 1 本が検出された。

出土遺物（第 6 図）

1・2 は刀子である。1 は先端部をわずかに欠き、2 はほぼ完形である。いずれも刃部は細身で、鹿角製の柄が残存している。2 は刃部先端に木質が残存している。3・4 は鉄鏃である。いずれも完形で長頸鏃である。4 は茎部に巻かれた木皮が残存している。

3 号横穴墓（第 7 図）

東側丘陵斜面、1 号横穴墓の西約 11 mで確認された、南西方向に開口する横穴墓である。標高は 128 m前後である。全長約 3.9 m、玄室主軸方向はN 49° Eである。羨門から玄室にかけての天井部は大きく崩落している。

前庭部は長さ約 1.33 m、最大幅約 1.39 mを測り、羨道部に向かってやや広がる平面形を呈している。前庭部床面はほぼ平坦である。羨門の床面には、本来閉塞石が嵌っていたものと思われる掘り込みが見られるが、閉塞石と思われる複数の凝灰岩の石材は水平に浮いた状態となっている。羨門部は幅約 0.47 m、残存高約 0.39 mを測る。

羨道は床面で長さ約 0.45 m、幅約 0.34 mを測る。羨道はほぼ平坦である。玄門部は幅約 0.58 m、残存高約 0.42 mを測る。玄門から玄室に続く床面は、わずかに下がるものの、ほぼ平坦である。

玄室は床面で裾部幅約 1.82 m、中央部幅約 1.98 m、奥壁幅約 1.72 m、奥行約 1.94 mの、左半がやや広い不整方形を呈する。床面には敷石や壁周溝は見られないが、玄室中央部、羨道から奥壁に向かって幅約 0.28 m、長さ約 1.84 m、深さ約 7 ㎝の排水溝が設けられている。天井部崩落のため天井高は不明であるが、壁面の残存高は約 0.68 mを測り、奥壁の形状から天井はドーム形であったと思われる。玄室東側壁面に赤色顔料の塗布が見られる。

この横穴墓からの遺物の出土はなかった。

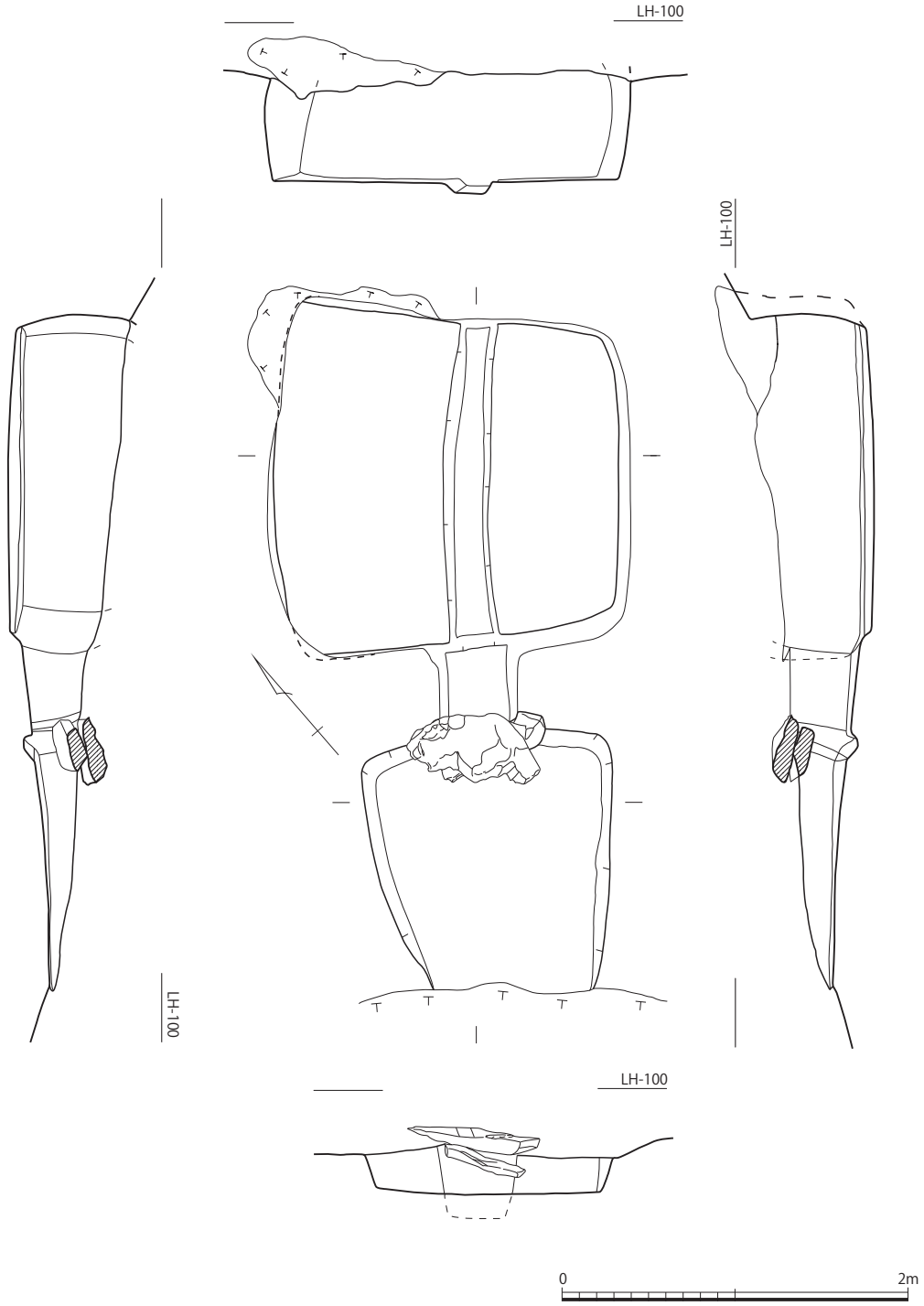
4 号横穴墓（第 8 図）

東側丘陵斜面、1 号横穴墓の南西約 7 m、3 号横穴墓の東約 6 mで確認された、南西方向に開口する横穴墓である。標高は 128 m前後である。全長約 3.5 m、玄室主軸方向はN 15° Eである。羨門から玄室にかけての天井部は崩落している。

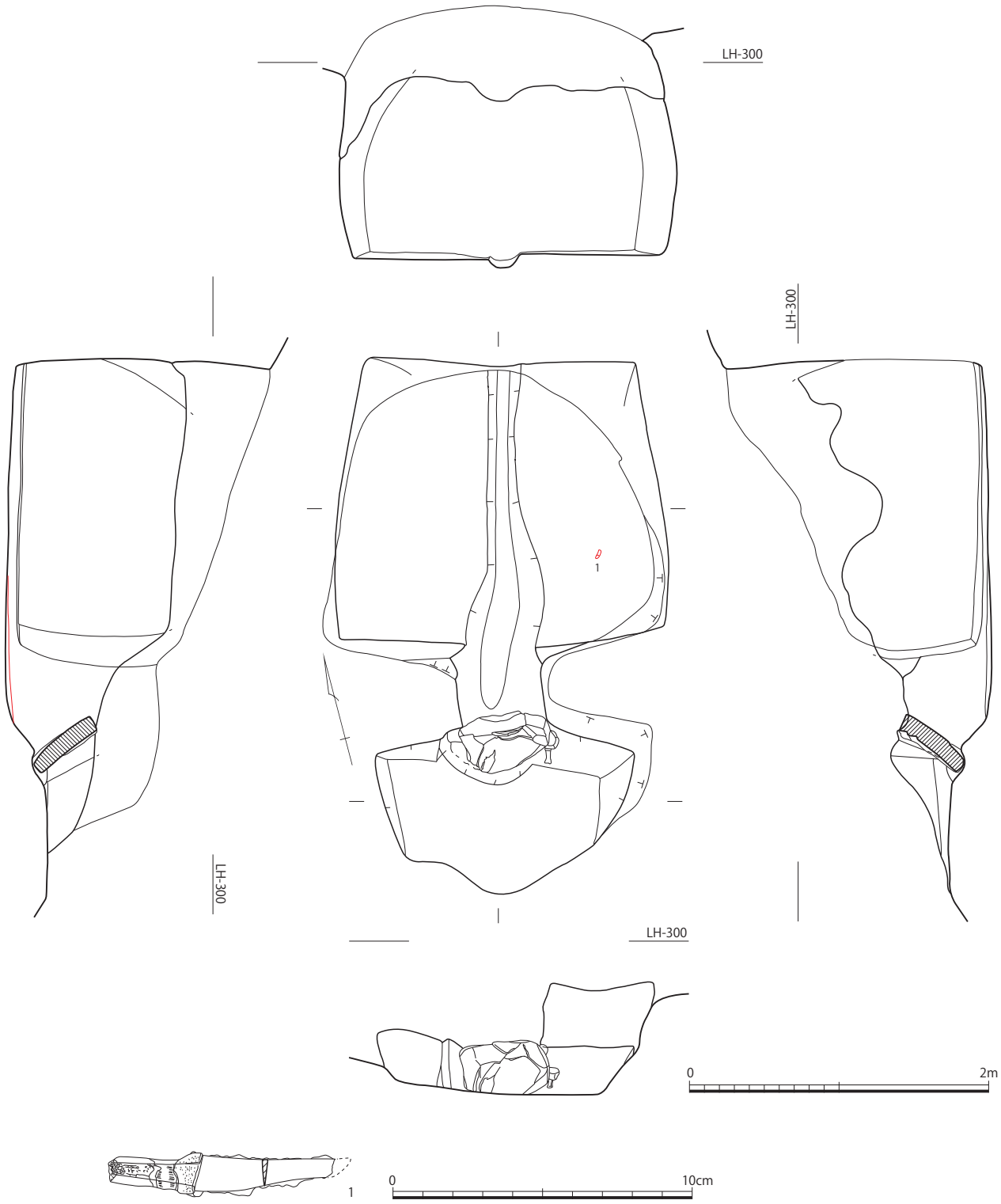
前庭部は長さ約 0.71 m、最大幅約 1.73 mを測り、羨道部に向かって広がる平面形を呈している。前庭部床面はほぼ平坦である。羨門の床面には、本来閉塞石が嵌っていたものと思われる掘り込みが見られ、閉塞石はほぼ原位置を保っているようである。閉塞石には凝灰岩の板石が 1 枚使用されている。羨門部は幅約 0.56 m、残存高約 0.46 mを測る。

羨道は床面で長さ約 0.39 m、幅約 0.57 mを測るが、玄室中央に設けられた排水溝の延長となっている。玄門部は幅約 0.47 m、残存高約 0.60 mを測る。羨道部は排水溝により掘削されているが、羨門付近と玄門から玄室に続く床面は、わずかに下がるものの、ほぼ平坦である。

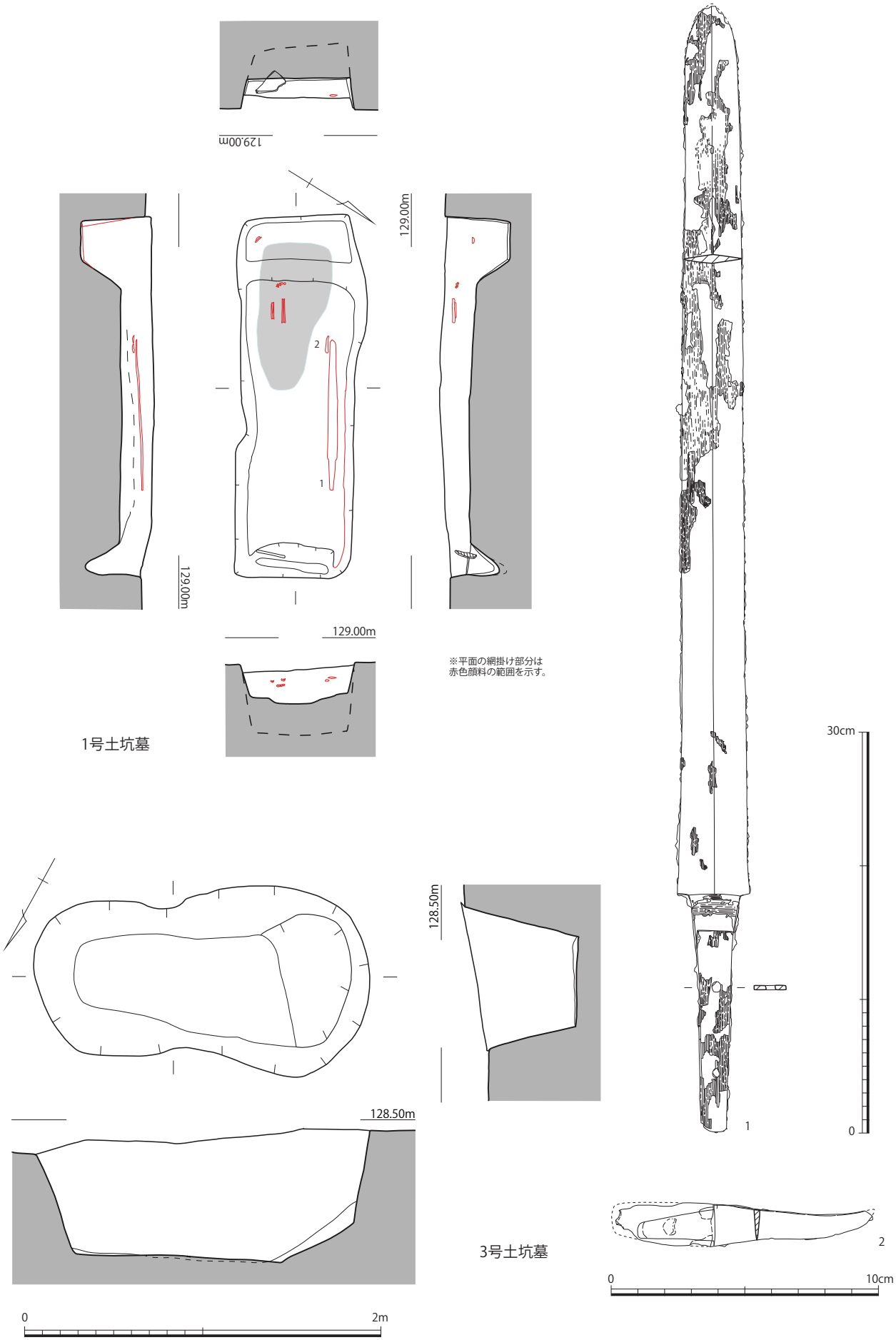
玄室は床面で裾部幅約 2.17 m、中央部幅約 2.16 m、奥壁幅約 1.76 m、奥行約 1.88 mの、やや奥に向かって狭くなった不整方形を呈する。床面には敷石や壁周溝等は見られないが、玄室中央部、羨道から奥壁に向かって



第 7 図　B 区 3 号横穴墓実測図（1/40）



第 8 図　B 区 4 号横穴墓・出土遺物実測図（1/40・1/2）



第９図　Ｂ区１・３号土坑墓・出土遺物実測図（1/30・1/4・1/2）

最大幅約 0.47 m、長さ約 2.26 m、最大深さ約 10 ㎝の排水溝が設けられている。天井部崩落のため天井高は不明であるが、壁面の残存高は約 1.44 mを測り、奥壁の形状から、天井はドーム形であったと思われる。

玄室右半やや手前で刀子 1 本が検出された。人骨等は残存していなかった。

出土遺物（第 8 図）

1 は刀子である。刃部先端を欠く。鹿角製の柄が残存している。

2. 土坑墓

西側の丘陵頂部から尾根筋にかけて 5 基と斜面に 1 基、東側の丘陵頂部付近で 1 基と斜面で 1 基、2 つの丘陵の鞍部で 2 基の計 10 基が検出された。西側丘陵頂部の 5 基は長軸が全て尾根に直行するようにつくられている。

1 号土坑墓（第 9 図）

西側丘陵頂部で確認された、主軸方向をＮ 32°Ｅにとる土坑墓である。標高は 128.7 mを測る。丘陵頂部に単独で存在するため、古墳である可能性が考えられたが、周溝は確認されなかった。墓坑の平面形は略長方形を呈し、検出面での規模は、長さ約 2.1 m、幅約 0.64 m、深さ約 20 ㎝を測る。検出面から床面までが浅いため、蓋は削平されたものと思われる。墓坑の内法は長さ約 1.48 m、幅約 0.5 mを測り、両小口は 1 段深く掘り込まれているため、本来は小口板が嵌め込まれていたと思われる。南西側床面にベンガラと思われる赤色顔料の付着が見られ、歯が数点検出されたことから、こちらが頭位であったと推定される。赤色顔料の付着範囲は、長さ約 0.82 m、最大幅約 0.4 mである。

墓内からは鉄剣 1 本と刀子 1 本が出土した。床面を若干掘りすぎたため、これらは北側壁そばでやや浮いた状態で検出されたが、この高さが本来の床面であったと考えられる。鉄剣･刀子とも切先を頭位方向に向けていた。また、上記の歯のほかに人骨片が出土している。

出土遺物（第 9 図）

1 は鉄剣である。全長 83.5 ㎝、身部長 67 ㎝、茎部長 16.5 ㎝、刃幅 5.4 ㎝を測る。ほぼ完形で、身および茎に木質が残存している。目釘穴が 2 か所穿たれている。鎬が明確で、剣身の断面はひし形を呈する。2 は刀子である。先端と柄部をわずかに欠くがほぼ完形である。鹿角製の柄が残存している。

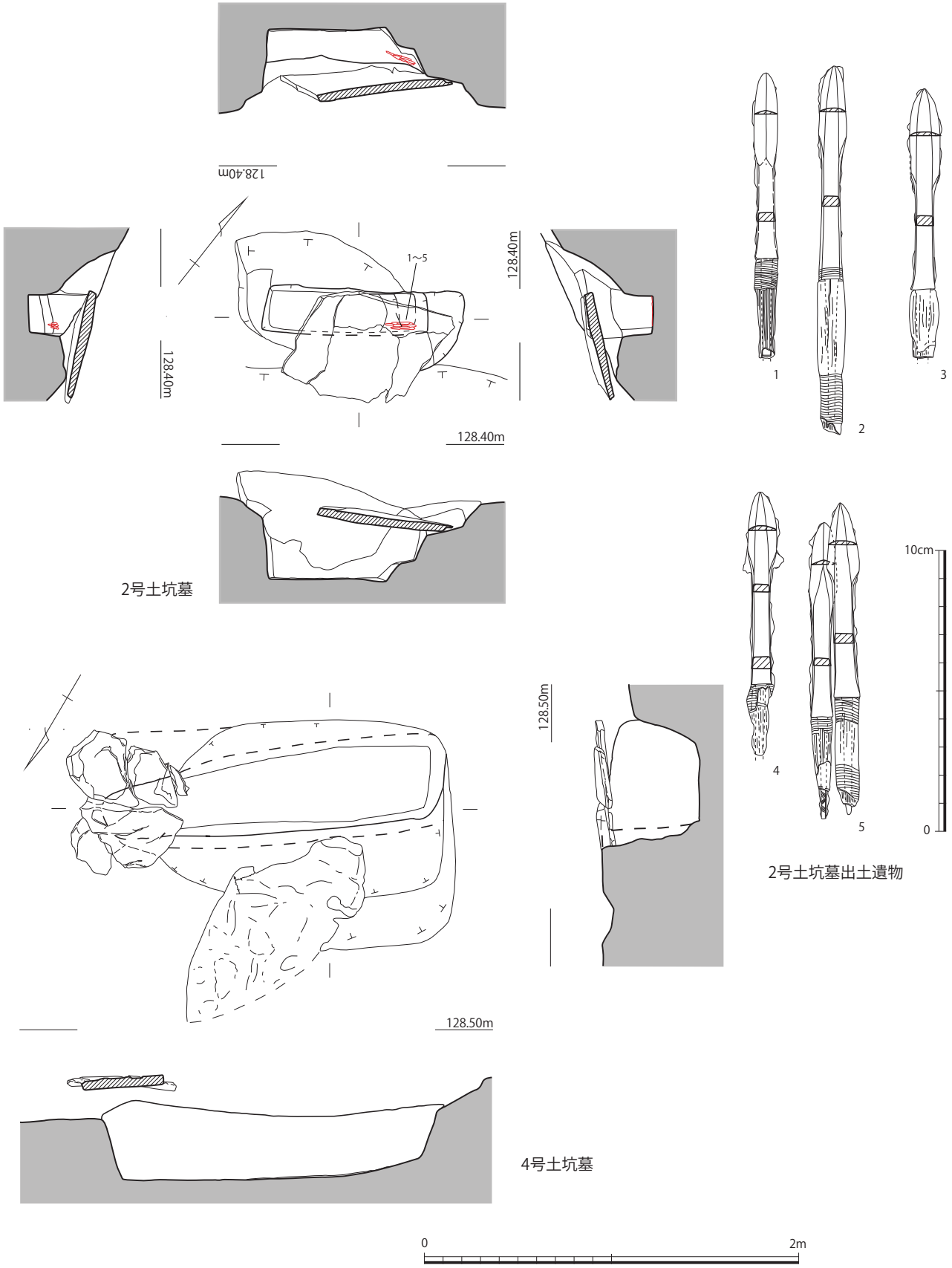
2 号土坑墓（第 10 図）

西側丘陵、1 号土坑墓の南東約 6 mの急斜面で確認された、主軸方向をＮ 52°Ｅにとる石蓋土坑墓である。標高は丘陵頂部からやや下がった約 128 mを測る。蓋石には長さ約 90 ㎝、幅約 55 ㎝、厚さ約 5 ㎝を測る安山岩の板石 1 枚が検出されたが、墓坑の東半を覆っているものの墓坑の位置とずれているため、原位置を保っていないと考えられる。また、西半を覆う別の蓋石が本来存在していた可能性がある。墓坑の平面形は長方形を呈し、検出面での規模は､長さ約 0.85 m､幅約 0.23 m､蓋石から床面までの深さ約 30 ㎝を測る､非常に小さなものである。床面は平坦である。墓坑内部には東側小口に段が設けられており、段上で鉄鏃が検出されたことから、こちらが頭位方向と推定される。

墓内からは鉄鏃 6 本がまとまった状態で出土した。人骨は出土しなかった。

出土遺物（第 10 図）

1 ～ 5 は鉄鏃である。鏃身形態は柳葉形を呈する。鏃身部と茎部を分ける箆被が明確に作りだされており、茎部に巻かれた木皮が良好に残る。2・3 はさらにそれを覆う木質も残存している。



第 10 図　B 区 2・4 号土坑墓・出土遺物実測図（1/30・1/2）

3 号土坑墓（第 9 図）

西側丘陵、1 号土坑墓の北西約 8 ｍの尾根上で確認された、主軸方向をＮ 59°　Ｅにとる土坑墓である。標高は丘陵頂部からやや下がった約 128.4 ｍを測る。墓坑の平面形はややくびれた長円形を呈し、検出面での規模は、長さ約 1.83 ｍ、最大幅約 1.04 ｍ、深さ約 60 ㎝を測る。墓坑が長方形に整っていないため土坑の可能性も考えられたが、1 号土坑墓などと同様に長軸を尾根と直行させていることから、墓と判断した。墓坑内の西側小口は床面の幅が広くまた斜めになっているが、そのほかは平坦である。平坦部分の長さは約 1.14 ｍ、最大幅は約 0.61 ｍを測る。墓内からは遺物や人骨の出土はなかったが、床面の幅が広い西側が頭位であったと考えられる。

4 号土坑墓（第 10 図）

西側丘陵、1 号土坑墓の北西約 10 ｍの尾根上で確認された、主軸方向をＮ 60°　Ｅにとる石蓋土坑墓である。標高は丘陵頂部からやや下がった約 128.2 ｍを測る。北東側小口には蓋石として安山岩の板石が複数検出された。墓坑の北西側に岩盤が露出しているため墓坑肩の広範囲が崩落しているものの、略長方形を呈すると考えられ、検出面での規模は、長さ約 1.75 ｍ、幅約 0.44 ｍ、深さ約 30 ㎝を測る。床面は平坦に整えられ、南西側が広くなっていることから、人骨の出土はないものの、こちらが頭位と考えられる。墓坑の内法は長さ約 1.61 ｍ、幅約 0.37 ｍを測る。

墓内からの遺物の出土はなかった。

5 号土坑墓（第 11 図）

西側丘陵、4 号土坑墓の北西約 10 ｍの尾根上で確認された、主軸方向をＮ 38°　Ｅにとる土坑墓である。標高は丘陵頂部からやや下がった約 127.8 ｍを測る。北側半分ほどが後世の撹乱により破壊されているが、墓坑の平面形は略長方形を呈していたと考えられ、残存部分の検出面での規模は、長さ約 0.88 ｍ、幅約 0.9 ｍ、深さ約 10 ㎝を測る。検出面から床面までが浅いため、大きく削平を受けたものと思われる。床面は平坦で、残存部分の墓坑の内法は長さ約 0.83 ｍ、幅約 0.76 ｍを測る。墓坑内からは遺物や人骨の出土はなかった。

6 号土坑墓（第 11 図）

1 号土坑墓から東に約 52 ｍ離れた東側丘陵頂部付近で確認された、主軸方向をＮ 37°　Ｅにとる土坑墓である。標高は約 132 ｍを測る。両小口を後世の撹乱により大きく破壊されているため明らかにはできないが、墓坑の平面形は略長方形と考えられる。残存部分の検出面での規模は、長さ約 1.12 ｍ、幅約 0.54 ｍ、深さ約 50 ㎝を測る。

墓内からは遺物や人骨の出土はなかった。

7 号土坑墓（第 12 図）

調査区中央、丘陵鞍部で確認された、主軸方向をＮ 55°　Ｗにとる土坑墓である。標高は約 126 ｍを測る。墓坑の平面形は略長方形を呈し、検出面での規模は、長さ約 1.3 ｍ、幅約 0.78 ｍ、深さ約 18 ㎝を測る。検出面から床面までが浅いため、上部は削平されたものと思われる。墓坑の内法は長さ約 1.08 ｍ、幅約 0.66 ｍを測り、床面は皿状を呈する。

墓内からは床面から浮いた状態で土師質土器小皿 1 点と人骨片、床面直上で人骨片と歯が検出されている。

出土遺物（第 12 図）

1 は完形の土師質土器小皿である。口径 7.2 ㎝、底径 6.1 ㎝、器高 1.9 ㎝を測る。焼成は良好で色調は淡褐色を呈する。胎土には角閃石・長石・石英・赤色粒子を含む。器面調整はハケ・横ナデが行われており、底部には糸切り痕が残る。

8 号土坑墓（第 12 図）

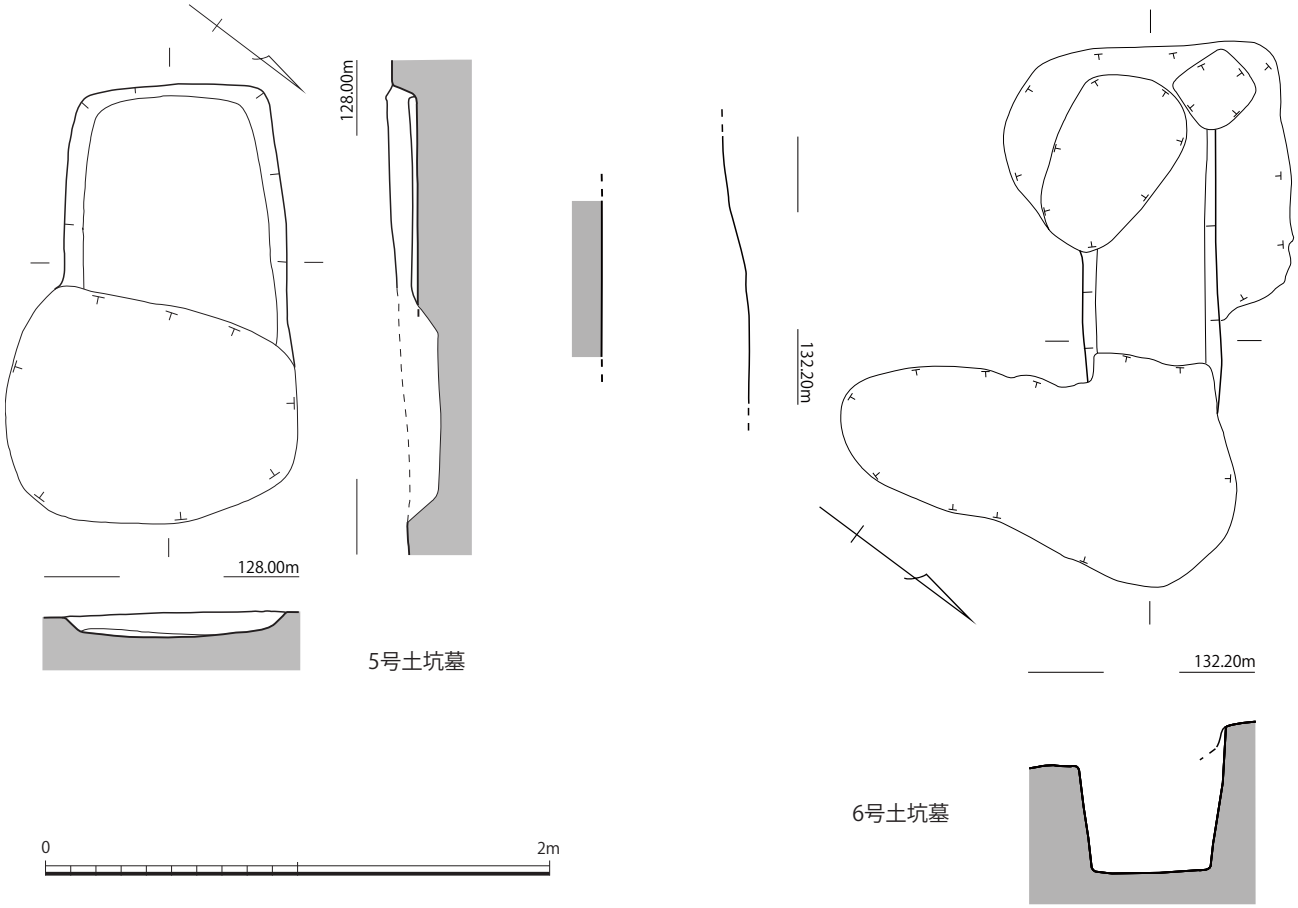
丘陵鞍部、7 号土坑墓の北西約 5 ｍで確認された、主軸方向をＮ 1°Ｗにとる土坑墓である。標高は約 126.4 ｍを測る。墓坑の平面形は略長方形を呈し、検出面での規模は、長さ約 2.36 ｍ、幅約 1.25 ｍ、深さ約 43 ㎝を測る。検出面から床面までが浅いため、上部は削平されたものと思われる。墓坑の内法は長さ約 2.14 ｍ、幅約 1.12 ｍを測り、床面は平坦である。

墓内からは遺物の出土はなかったが、床面直上で獣骨片が検出されている。

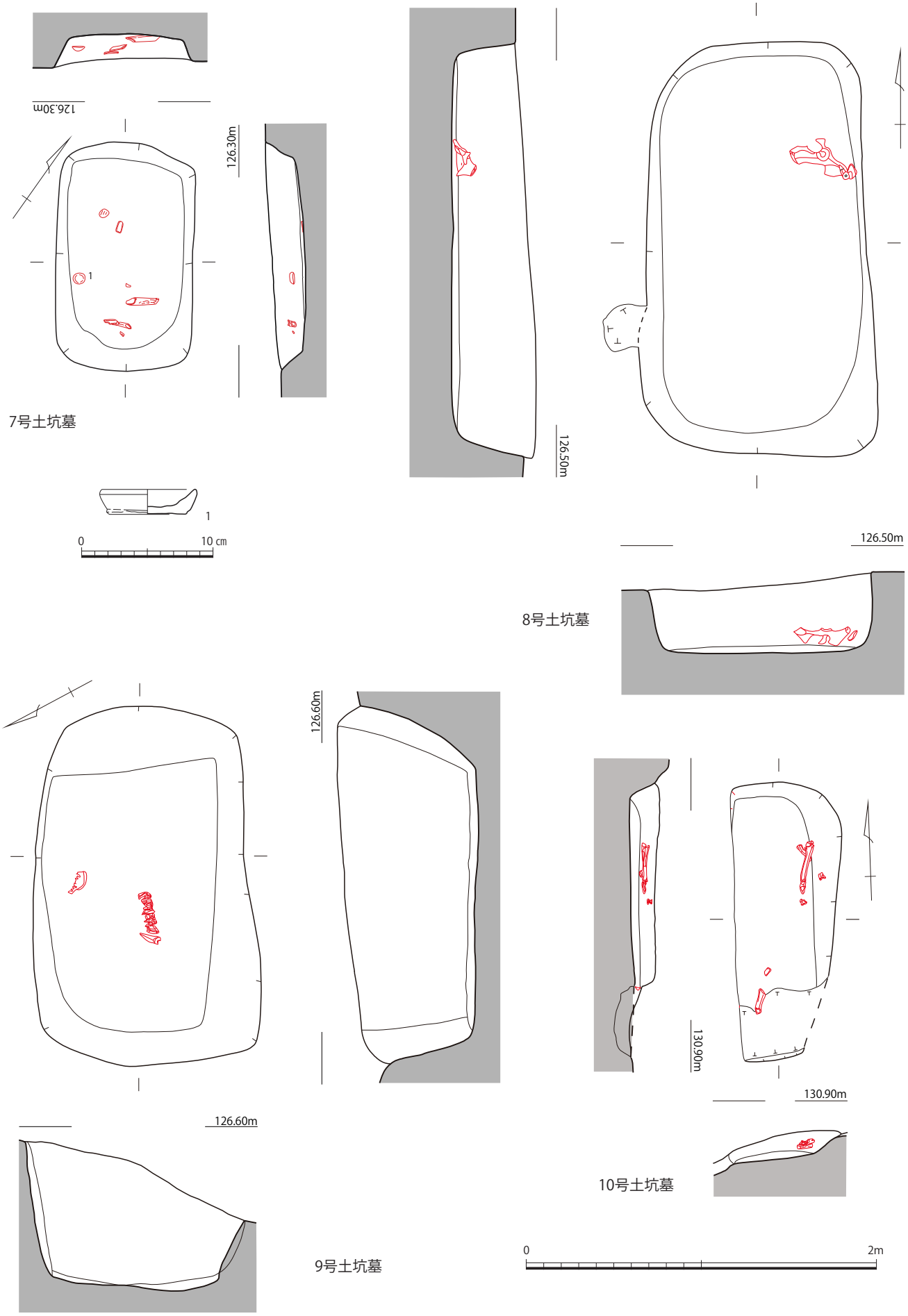
9 号土坑墓（第 12 図）

8 号土坑墓から北西に約 27 ｍ離れた西側丘陵斜面で確認された、主軸方向をＮ 28°Ｗにとる土坑墓である。標高は約 126.3 ｍを測る。墓坑の平面形は不整長方形を呈し、検出面での規模は、長さ約 2.05 ｍ、幅約 1.2 ｍ、深さ約 78 ㎝を測る。墓坑の内法は長さ約 1.5 ｍ、幅約 1.0 ｍを測る。

墓内からは大型動物の歯や骨片が検出された。墓坑の規模から、牛馬等の埋葬痕跡と考えられる。



第 11 図　B 区 5・6 号土坑墓実測図（1/30）



第 12 図　B 区 7 ～ 10 号土坑墓・出土遺物実測図（1/30・1/4）

10号土坑墓（第12図）

7号土坑墓から北東に約21ｍ離れた東側丘陵の緩斜面で確認された、主軸方向をＮ3°Ｗにとる土坑墓である。標高は約130.7ｍを測る。南側の一部が後世の撹乱により破壊されているが、墓坑の平面形は略長方形を呈し、検出面での規模は、長さ約1.58ｍ、幅約0.56ｍ、深さ約14㎝を測る。検出面から床面までが浅いため、上部は削平されたものと思われる。残存部分の墓坑の内法は長さ約1.12ｍ、幅約0.45ｍを測る。

墓内からは遺物の出土はなかったものの、やや浮いた状態で人骨片が検出された。

（３）Ｃ区の遺構と遺物（第13図）

事業予定範囲の中央やや北寄り、東の丘陵から西にわずかに突き出た、Ｂ区から小さな谷を隔てて南東約90ｍにある小さな丘陵端部にある。調査区は東西約40ｍ、南北約24ｍを測り、土坑1基とピット群が確認された。調査面積は400㎡である。

土坑（第14図）

調査区北端付近、丘陵頂部から少し下がった斜面で確認された、主軸方向をＮ19°Ｅにとる土坑である。標高は約126ｍを測る。墓坑の平面形は略長方形を呈し、検出面での規模は、長さ約3.3ｍ、幅約1.42ｍ、深さ約18～40㎝を測る。検出面から床面までが浅いため、上部は削平されたものと思われる。残存部分の墓坑の内法は長さ約2.8ｍ、幅約0.96ｍを測る。

土坑内からは遺物の出土はなかったものの、やや浮いた状態で大型動物のものと思われる顎やその他の骨が検出された。土坑の規模とあわせて考慮すると、牛馬等の埋葬痕跡と思われる。

（４）Ｄ区の遺構と遺物（第15図）

事業予定範囲のほぼ中央、Ｂ区の丘陵の西側に広がる標高約106～108ｍを測る谷で確認された。調査区は東西約32ｍ、南北約19ｍを測る。調査面積は348㎡である。調査区中央部でピット群が確認されたが、建物等として成立するものはなかった。ピットからはわずかに中世と思われる土器片が出土しているが、実測可能なものはなかった。

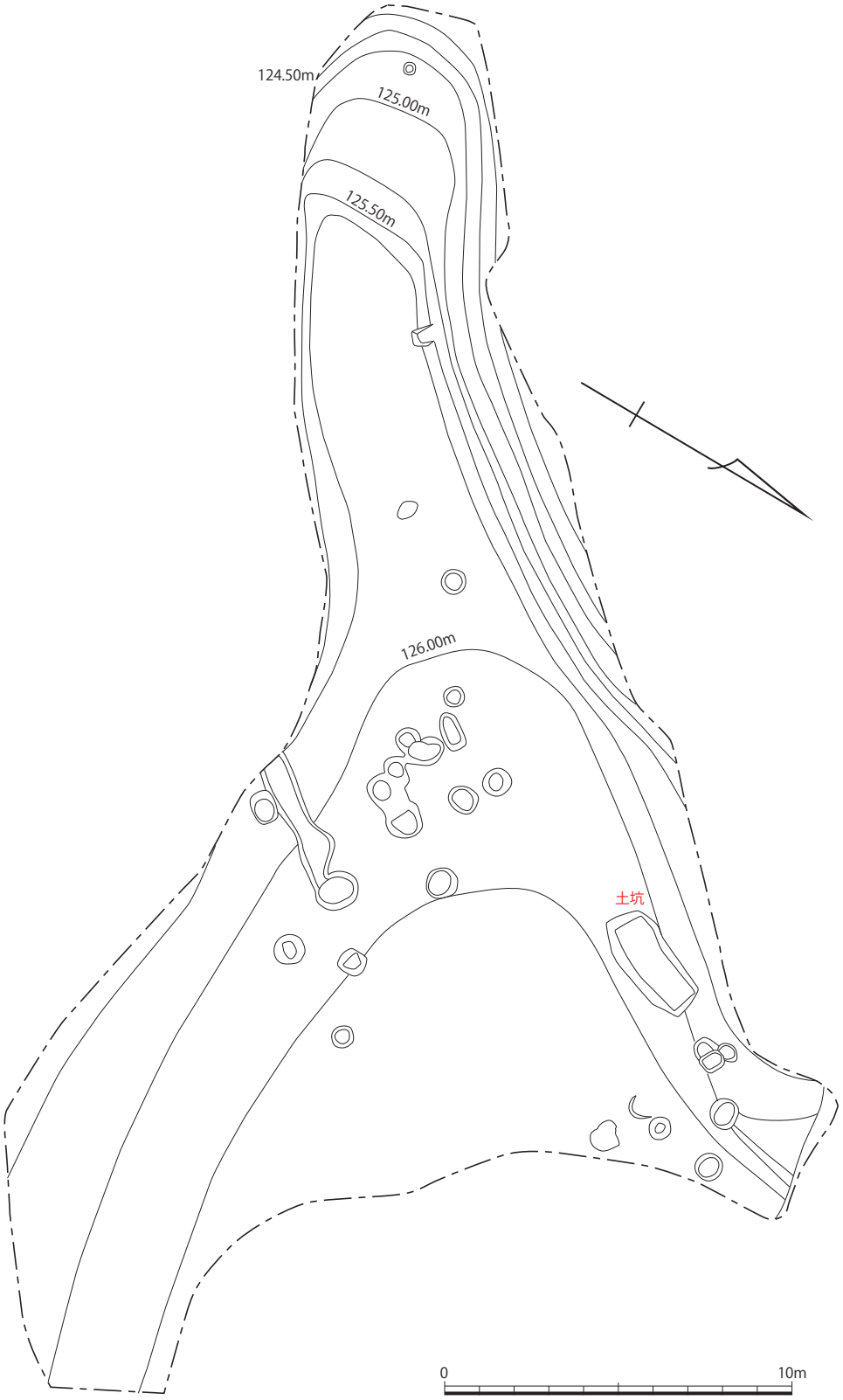
（５）Ｅ区の遺構と遺物（第16図）

事業予定範囲の南寄り、Ｂ～Ｄ区から谷を隔てて、南の丘陵から北向きに長く伸びる舌状丘陵の頂部で確認された。調査区は東西約35ｍ、南北約117ｍを測り細長い平面形である。調査面積は1,803㎡である。Ｂ区と類似した2つの丘陵頂部を含むが、遺構が確認されたのは北側の頂部のみである。

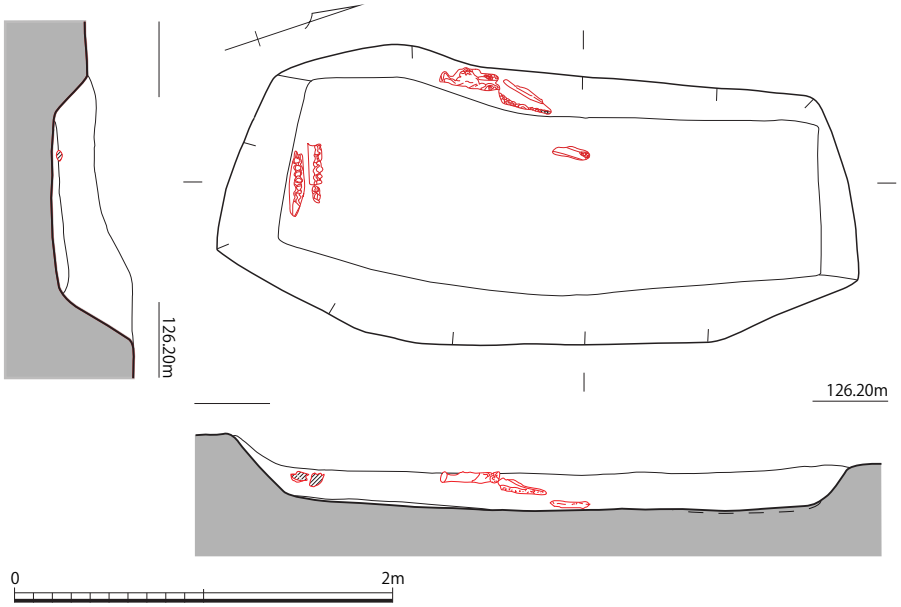
土坑墓（第16図）

調査区東端付近、2つの丘陵のうち北側の頂部で確認された、主軸方向をＮ30°Ｗにとる石蓋土坑墓である。標高は約126.6ｍを測る。蓋石は長さ約112㎝、幅約85㎝、厚さ約10㎝を測る安山岩の大きな1枚石である。対して墓坑は検出面での規模で長さ約66㎝、幅約20㎝、深さ約52㎝と深さに対する平面規模が小さく、小児用の墓と思われる。墓坑および蓋石の周囲には深さ3㎝ほどの浅い掘り込みが見られる。土層観察から、埋葬は１回のみと考えられる。

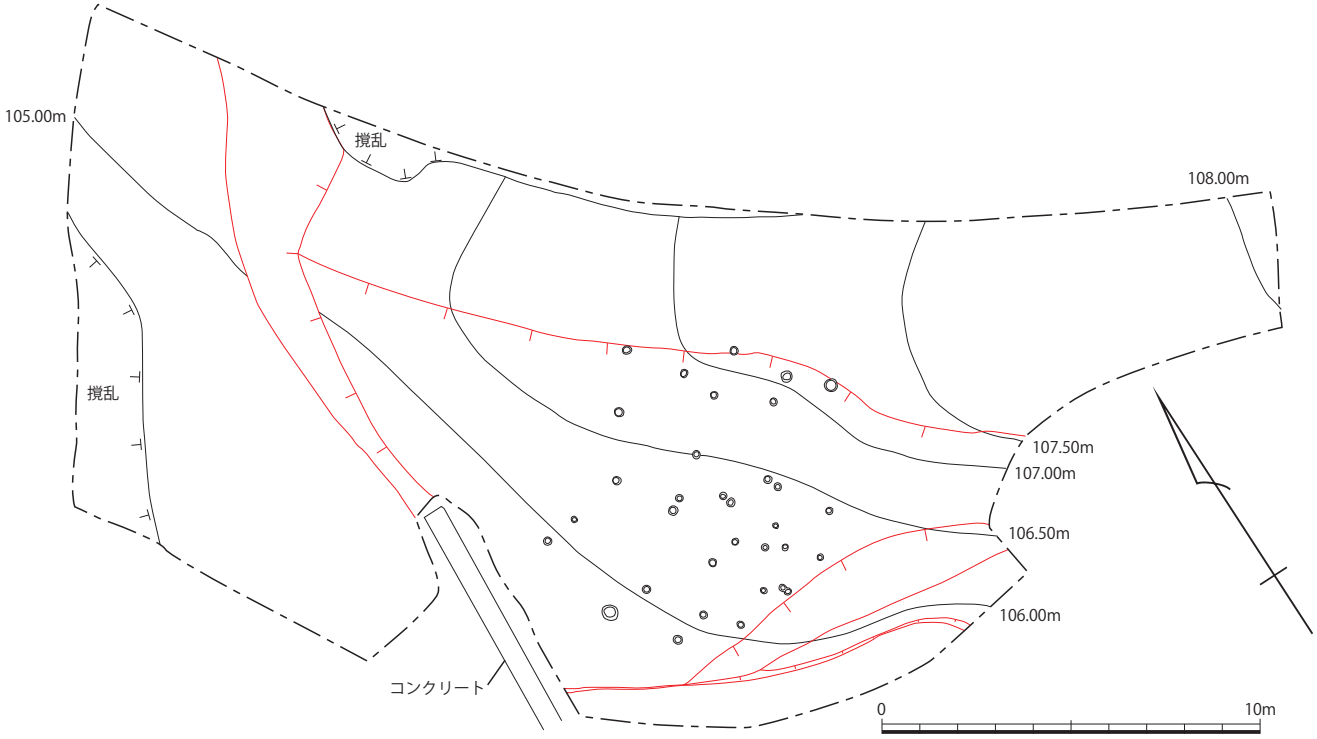
墓内からは遺物や人骨等の出土はなかった。



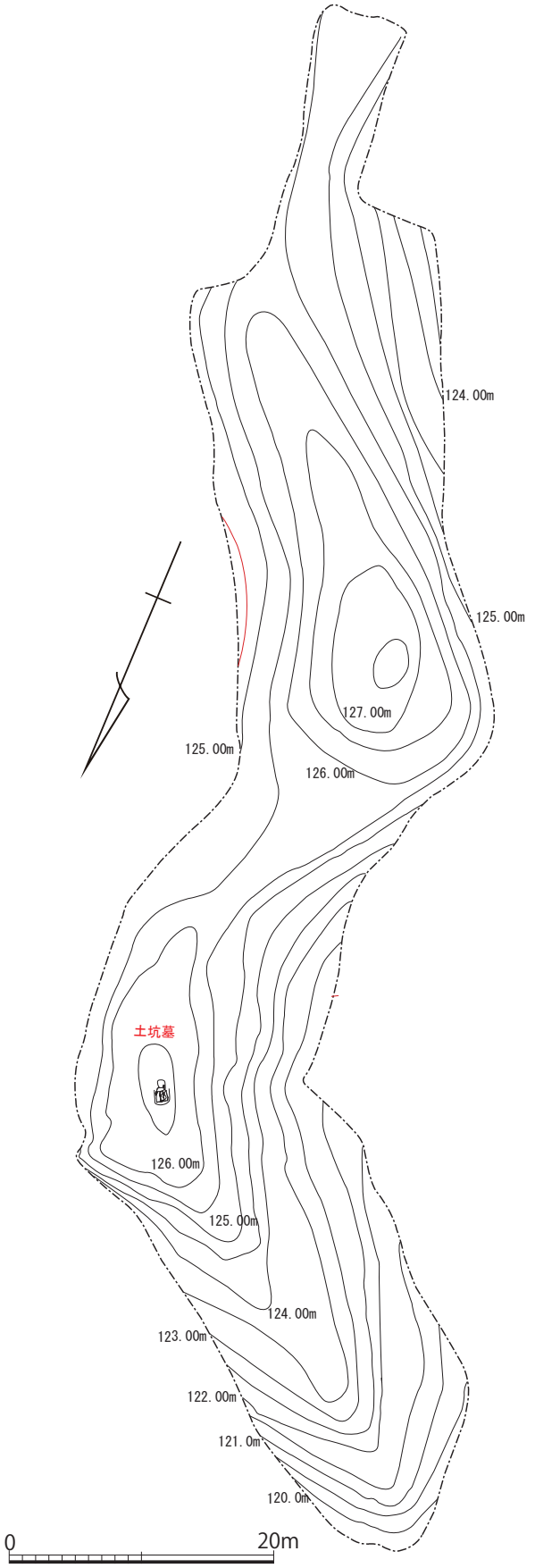
第 13 図　C 区遺構配置図（1/200）

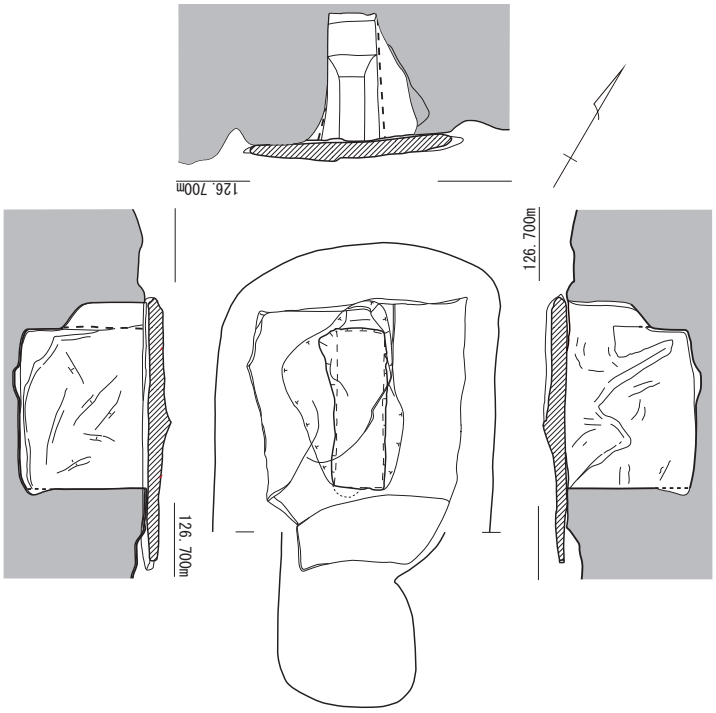


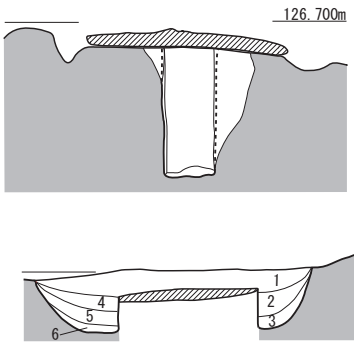
第 14 図　C 区土坑実測図（1/40）

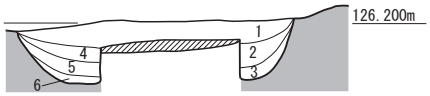


第 15 図　D 区遺構配置図（1/200）





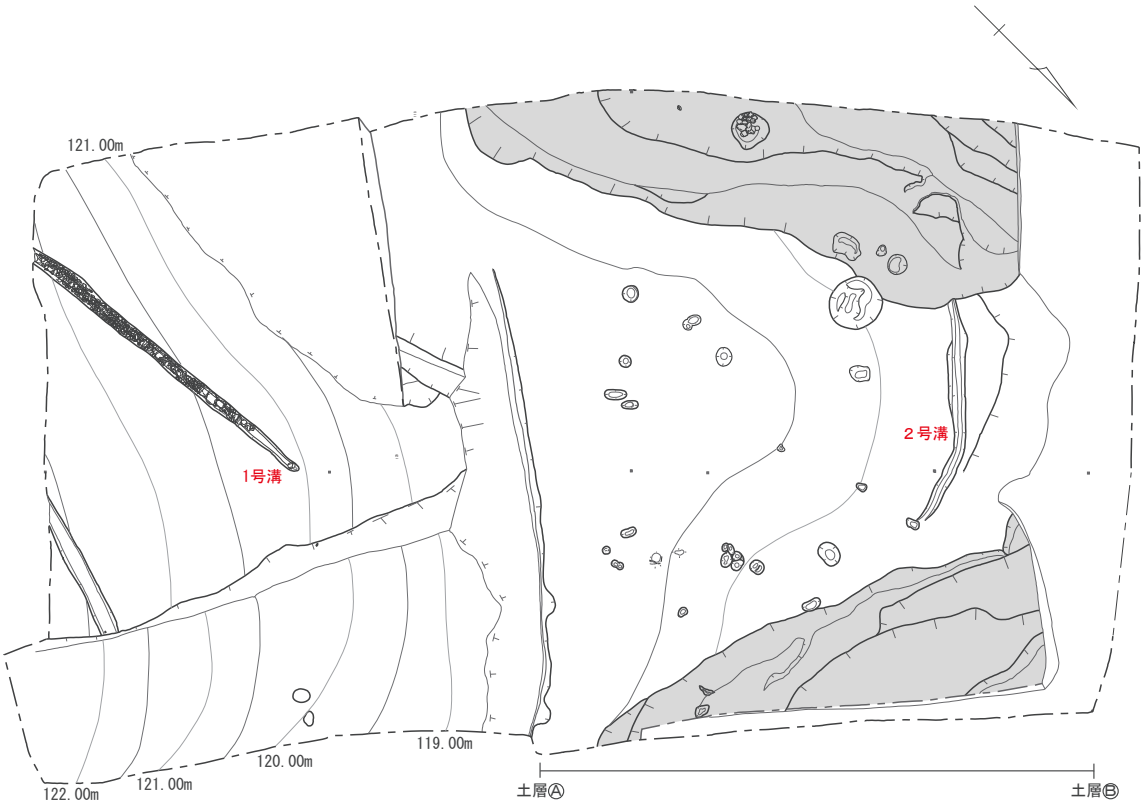




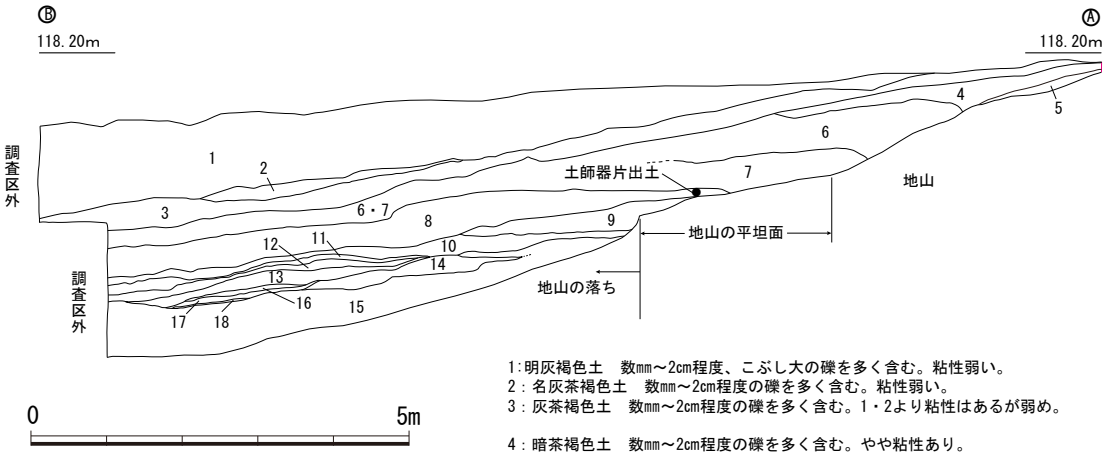
1、黄・茶褐色	粘性なく軽い 微細な粒子	数mm～1ｃｍの礫をわずかに含む
2、茶褐色	粘性なく軽い 微細な粒子	数mm～1ｃｍの礫をわずかに含む
3、やや黒茶褐色	微細な粒子	3～4ｃｍの軽石を多少含む　ややかたい
4、茶褐色	微細な粒子	
5、赤茶褐色	微細な粒子	3～5ｃｍの軽石を含む
6、やや茶褐色	微細な粒子	2～3ｃｍの軽石を含む　ややかたい

0　1m

第 16 図　E 区遺構配置図・土坑墓実測図（1/500、1/30）



※網掛け部分はため池状遺構を示す。



1:明灰褐色土　数mm～2cm程度、こぶし大の礫を多く含む。粘性弱い。
2：名灰茶褐色土　数mm～2cm程度の礫を多く含む。粘性弱い。
3：灰茶褐色土　数mm～2cm程度の礫を多く含む。1・2より粘性はあるが弱め。

4：暗茶褐色土　数mm～2cm程度の礫を多く含む。やや粘性あり。
5：灰色土　礫をほとんど含まない。砂混じり。
6：黒褐色土　数mm～2cm程度の礫を多く含む。粘質土。
7：黒褐色土　数mm～2cm程度の礫をやや含む。砂がブロック状に入る。粘質土。
8：黒茶褐色土　数mm～2cm程度の礫を多く含む。やや砂っぽい。やや粘質。

9：黒褐色土　1cm前後の礫を含む。粘性強い
10：暗茶褐色土　他の層に比べて比較的礫が少ない。粘性強い。
11：暗灰褐色土　数mm～2cm程度の礫を非常に多く含む。粘質土。
12：暗茶褐色土　礫をほとんど含まない。土の粒度が細かく粘性あり。
13：暗灰褐色土　11と類似するが、11に比べて粒度がやや粗い。
14：黄褐色土　砂質土。2～3cm程度の礫を多く含む。
15：黒褐色土　礫をほとんど含まない。砂質土部分と粘質土部分がブロック状に入る。
16：暗黄褐色土　砂質土。
17：暗茶褐色土　12に類似するが、12よりやや白っぽい。礫を含まず粘性あり。
18：暗黄褐色土　16とほぼ同じ。
地山：凝灰岩の岩盤

第 17 図　F 区遺構配置図・ため池状遺構土層図（1/200・1/100）

（６）Ｆ区の遺構と遺物（第 17 図）

事業予定範囲の南寄り、Ｅ区の東に広がる谷の最奥部で確認された。調査区は東西約 17 ｍ、南北約 30 ｍを測る略長方形を呈する。凝灰岩の岩盤上で溝２条とため池状遺構、ピット群が確認された。調査面積は 471 ㎡である。

1 号溝（第 17 図）

調査区南東端から北向きに延び、南側は調査区外へと続く。調査区内での規模は、検出面で長さ約 9.0 ｍ、幅約 0.4 ｍ、深さ約 15 ～ 25 ㎝を測る。溝の内部では小礫が充填されているような状況が確認された。

この遺構からの出土遺物はなかった。

2 号溝（第 17 図）

調査区西側、北東から南西に向かって等高線とほぼ並行に伸び、南側のため池状遺構へと続く。検出面で長さ約 5.8 ｍ、幅約 0.3 ～ 0.5 ｍ、深さ約 6 ～ 20 ㎝を測る。底面がわずかに南に向かって下がっており、南側のため池状遺構に水を流すための溝と考えられる。

この遺構からの出土遺物はなかった。

ため池状遺構（第 17 図）

調査区北半、溝やピット群からやや下がった位置で、意図的に数段にわたって掘削したような痕跡が確認され、これをため池状遺構と判断した。埋土中からの遺物は少なく、また実測可能なものはなかったが、第 17 図の土層図のうち、1 ～ 3 層は茶褐色系の土で、この層から底部に糸切り痕が残る土師質土器の小片が出土しており、中世以降の埋土と考えられる。また、4 ～ 8 層は黒褐色系の土で、8 層からケズリのある土師器片が出土しており、古墳時代以後の埋土と考えられる。9 層以下は黒色土化している。

Ⅳ　総括

今回の調査では、Ｂ区で横穴墓 4 基・土坑墓 10 基、Ｃ区で土坑 1 基・ピット群、Ｄ区でピット群、Ｅ区で土坑墓 1 基、Ｆ区で溝 2 条・ため池状遺構が確認された。遺物を伴う遺構は少ないが、これまで日田市内や周辺地域で行われた発掘調査やさまざまな研究から遺構の時期を絞ってみたい。

Ｂ区の横穴墓はいずれも墓道が短く、小迫墳墓群 (註 1) や中津市上ノ原横穴墓群 (註 2) を参考にすると、5 世紀後半～ 6 世紀前半に位置付けられる。出土遺物のうち鉄鏃について水野氏の編年 (註 3) を参考にすると、1 号横穴墓の無茎鏃は正三角形に近い鏃身に浅い抉りのある中期 4 ～後期 1 段階（5 世紀後半～ 6 世紀前半）、2 号横穴墓の長頸鏃は鏃身の 2 倍ほどの長さの頸部と角関・ナデ関、先端のみ鎬が見られるという特徴から中期 3 段階（5 世紀前半～中頃）と考えられる。これらの特徴と横穴墓の形態と合わせて考えると、1・2 号横穴墓は 5 世紀中頃～ 6 世紀前半の範疇にとらえることができ、2 号横穴墓がやや古相を示すと考えられる。3・4 号横穴墓については時期判断可能な遺物に乏しいが、立地的なまとまりから 1 号横穴墓と同時期、あるいは玄室形態からその少し後と考えたい。

次にＢ・Ｅ区の土坑墓について見てみる。遺物が出土しているのは 1・2・7 号土坑墓で、まず 2 号土坑墓の鉄鏃はいずれも短頸鏃と見られ、長頸化傾向と鏃身の長大化が看取できることから中期 2 段階（5 世紀前半）と考えてよさそうである。1 号土坑墓の鉄剣は赤迫遺跡Ｇ区 6 号墓 (註 4) のものと形態的類似性が見られ、5 世紀前半～ 6 世紀中頃ととらえられるが、Ｂ区北側丘陵の 1 ～ 5 号土坑墓のなかで 1 号土坑墓が丘陵の最高所につくられることから、土坑墓のなかでは最初に造営されたものと考えるのが自然であり、5 世紀前半ととらえておきたい。2・4 号土坑墓は蓋石に安山岩が採用されており、前述の小迫墳墓群では安山岩を棺材に用いた墓は古墳時

代初頭～５世紀前半代とされていることから、５世紀前半代に１～５号土坑墓が次々と造営されたものと思われる。南側丘陵の尾根頂部につくられた６号土坑墓もこれらと同時期ととらえたい。Ｅ区の土坑墓も安山岩の蓋石を持つことから同時期と考えられるが、Ｂ・Ｇ区での土坑墓の在り方とは全く異なり、長い丘陵上の最高所に極めて小さい土坑墓がただ１基のみ存在する。盛土や周溝などを伴わないことから古墳である可能性は低く、遺物を持たないためそれ以上の詳細については不明といわざるを得ない。しかし、この遺構とＢ区１・６号土坑墓は丘陵頂部の埋葬という共通点があり、同様の例は小迫墳墓群第２地区でも見られ、古墳と土坑墓の違いはあるもののこの時期の埋葬場所の選地に関するひとつの形といえよう。Ｂ区７号土坑墓から出土した土師質土器小皿は、渡邉氏の編年[註5]を参考にすると、口径・色調・底部糸切りの特徴からⅣ期以降、15世紀中頃以降と考えられる。Ｂ区８～10号墓は遺物がなく時期不明であるが、８・９号墓とＣ区土坑からは獣骨が出土しており、牛馬等の埋葬痕跡と考えられる。近世に人間の墓域のなかに大型獣が埋葬される例は小迫墳墓群でも見つかっている。

Ｄ区では丘陵裾部にあたる谷の緩斜面の一部で集中してピット群が検出されたが、中世の所産と思われる土器片がわずかに出土したのみで建物等として成立するものは確認できず、時期等は不明である。

Ｆ区では小谷最奥部で溝２条とため池跡と見られる遺構が確認された。遺物は少量であるが、底部糸切りの土師質土器片が出土していることから、これらは中世の水田開発に関連する遺構と推測される。赤迫遺跡から南東方面にある求来里地区で行われた水がかり調査[註6]では、ちょうどＦ区の位置に堤が存在したと指摘されている。このことから、Ｆ区で見つかったため池は、ほぼ同じ位置で堤として近年まで利用されてきたものであろうことが想像される。

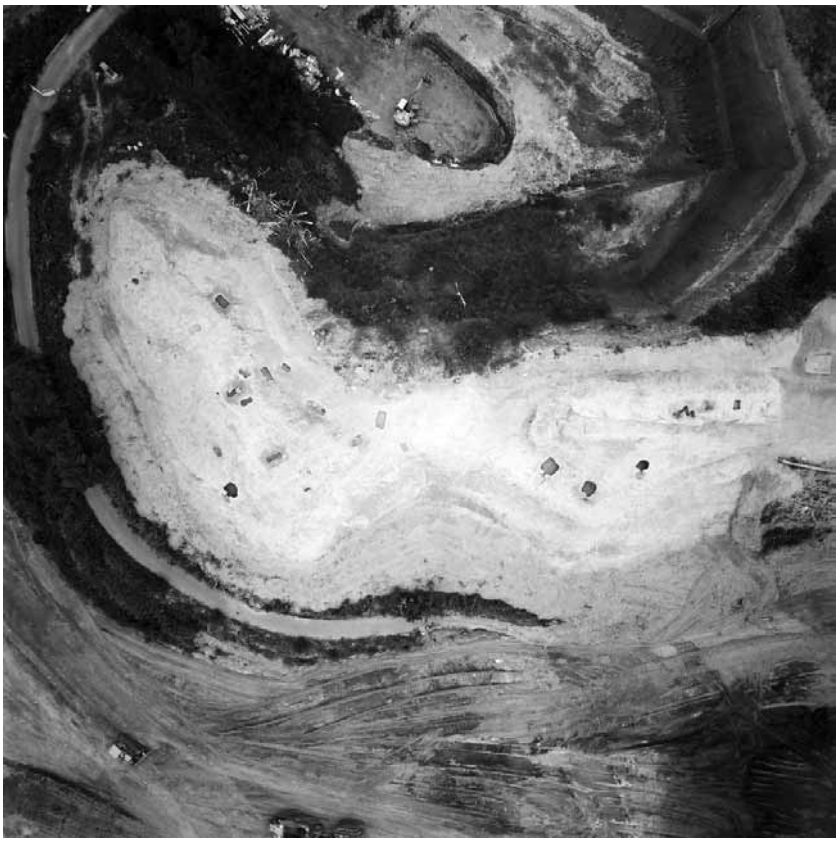
（註１）小柳和宏ほか編　1995『小迫墳墓群』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書第３集　大分県教育委員会
（註２）村上久和ほか編　1991『上ノ原横穴墓群Ⅱ』一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書（2）　大分県教育委員会
（註３）水野敏典　2007「古墳時代鉄鏃研究の諸問題－東アジアの中の鉄鏃様式の展開－」『古代武器研究』vol.8　古代武器研究会
（註４）若杉竜太ほか編　2014『赤迫遺跡Ｇ区　元宮遺跡１・２・６次』日田市埋蔵文化財調査報告書第114集　日田市教育委員会
（註５）渡邉隆行編　2010『慈眼山遺跡７次』日田市埋蔵文化財調査報告書第95集　日田市教育委員会
（註６）飯沼賢司ほか　2009「求来里地区における村落遺跡調査」
『求来里の遺跡Ⅰ－県営経営体育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（1）－町ノ坪遺跡Ｂ区の調査』　日田市教育委員会

第1表　鉄製品観察表

挿図番号	調査区	遺構名	遺物番号	器種	最大長	最大幅	最大厚	備考
5-1	B	1号横穴墓	1	刀子	11.1	5.5	0.2	完形品　木質基部残存
5-2	B	1号横穴墓	2	鉄鏃	3.5	3.9	0.1	完形品　木質部分残存
5-3	B	1号横穴墓	3	鉄鏃	2.1	3.6	0.1	一部欠損　木質部分残存
6-1	B	2号横穴墓	3	鹿角製刀子	(8.2)	1.1	0.2	完形品
6-2	B	2号横穴墓	4	鹿角製刀子	9.7	1.3	0.2	完形品
6-3	B	2号横穴墓	1	鉄鏃	13.9	0.8	0.4	完形品
6-4	B	2号横穴墓	2	鉄鏃	12.6	1.5	0.3	完形品
8-1	B	4号横穴墓	1	鹿角製刀子	(7.4)	1.2	0.2	切先欠損
9-1	B	1号土坑墓	-	鉄剣	83.5	5.4	0.7	完形、身および関に木質残存
9-2	B	1号土坑墓	-	鹿角製刀子	(8.7)	1.6	0.2	ほぼ完形品
10-1	B	2号土坑墓	-	鉄鏃	(10.1)	0.9	0.3	基部欠損
10-2	B	2号土坑墓	-	鉄鏃	(12.4)	1.0	0.4	基部欠損
10-3	B	2号土坑墓	-	鉄鏃	(9.5)	1.1	0.4	基部欠損
10-4	B	2号土坑墓	-	鉄鏃	(8.5)	0.9	0.4	基部欠損
10-5左	B	2号土坑墓	-	鉄鏃	10.6	1.0	0.3	完形
10-5右	B	2号土坑墓	-	鉄鏃	11.1	1.2	0.3	完形

※単位はcm、ｇ。（）は現存長。

写真図版１



Ｂ区全景（真上から）

Ｂ区全景（南から）

B 区東半（3・4・1 号横穴墓）

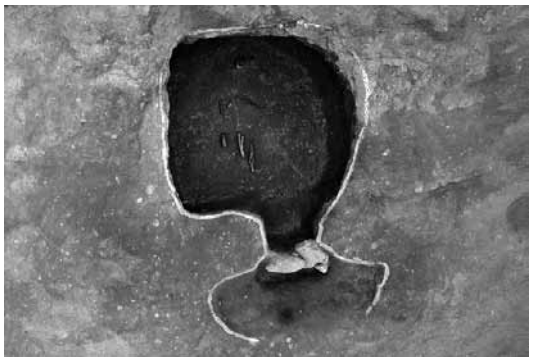
B 区西半（2 号横穴墓）

写真図版 3

①B 区 1 号横穴墓（真上から）

②B 区 1 号横穴墓刀子出土状況

③B 区 1 号横穴墓鉄鏃出土状況



④B 区 2 号横穴墓（真上から）

⑤B 区 2 号横穴墓閉塞石検出状況

⑥B 区 2 号横穴墓玄室

⑦B 区 2 号横穴墓遺物・人骨出土状況

⑧B 区 2 号横穴墓刀子出土状況

①B 区 3 号横穴墓検出状況（南から）

②B 区 3 号横穴墓（真上から）

③B 区 3 号横穴墓閉塞石状況

④B 区 3 号横穴墓閉塞石除去状況

⑤B 区 3 号横穴墓玄室

⑥B 区 4 号横穴墓（真上から）

⑦B 区 4 号横穴墓玄室

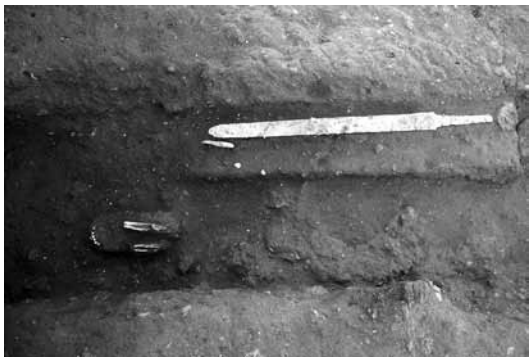
⑧B 区 4 号横穴墓閉塞石検出状況

写真図版５

①Ｂ区４号横穴墓玄室　刀子検出状況

②Ｂ区１号土坑墓（南東から）

③Ｂ区１号土坑墓（北東から）



④Ｂ区１号土坑墓遺物出土状況

⑤Ｂ区２号土坑墓蓋石検出状況（南西から）

⑥Ｂ区２号土坑墓（真上から）

⑦Ｂ区２号土坑墓鉄鏃出土状況

⑧Ｂ区３号土坑墓（南から）

①B 区 4 号土坑墓（北から）

②B 区 5 号土坑墓（北から）

③B 区 6 号土坑墓（南から）

④B 区 7 号土坑墓（南東から）

⑤B 区 8 号土坑墓（南から）

⑥B 区 9 号土坑墓（北から）

⑦C 区全景（北東から）

⑧C 区土坑（東から）

写真図版 7

①Ｄ区全景（北から）

②Ｄ区ピット群（北から）

③Ｅ区調査前風景（東から）

④Ｅ区全景（西から）

⑤Ｅ区土坑墓周辺地形（西から）

⑥Ｅ区土坑墓（北東から）

⑦Ｅ区土坑墓（北西から）

⑧Ｅ区土坑墓土層

①Ｅ区土坑墓完掘状況①

②Ｅ区土坑墓完掘状況②

③Ｅ・Ｆ区近景（東から）

④Ｆ区全景（西から）

⑤Ｆ区全景（南東から）

⑥Ｆ区全景（北西から）

⑦Ｆ区１号溝（南から）

⑧Ｆ区ため池状遺構

写真図版 9

①Ｆ区ため池状遺構土層　①

②Ｆ区ため池状遺構土層②

5 － 2
(B-1 号横穴墓)

9 － 1
(B-1 号土坑墓)

10 － 1
(B-2 号土坑墓)

10 － 3
(B-2 号土坑墓)

6 － 4
(B-2 号横穴墓)

12 － 1
(B-7 号土坑墓)

8 － 1
(B-4 号横穴墓)

9 － 2
(B-1 号土坑墓)

報　告　書　抄　録

ふりがな	あかさこいせき
書名	赤迫遺跡 -B～F区の報告-
副書名	
巻次	
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第130集
編著者名	行時　桂子
編集機関	日田市教育庁文化財保護課
所在地	〒877-8601　日田市田島2丁目6-1
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601　日田市田島2丁目6-1
発行年月日	2017年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あかさこ 赤迫 いせき 遺跡	おおいたけんひたし 大分県日田市 おおあざきたまめだ 大字北豆田	44204-6	204145	33° 19′ 22″	130° 57′ 00″	19940224 ～ 19941105	(A区　3,382㎡) B区　2,477㎡ C区　400㎡ D区　348㎡ E区　1,803㎡ F区　471㎡	記録保存調査

所収遺跡名		種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
赤迫遺跡	B区	墳墓	5～6世紀前半・15世紀中頃以降	横穴墓4 土坑墓10	土師質土器 鉄鏃、刀子、鉄剣	丘陵上に営まれた墳墓群
	C区	集落	近世か	土坑1・ピット群	―	土坑は牛馬等の埋葬痕跡か
	D区	集落	中世か	ピット群	中世の土器片	時期・性格等不明
	E区	墳墓	5世紀前半	土坑墓1	―	丘陵上に単独で存在する小規模の土坑墓
	F区	集落	中世	溝2、ため池状遺構	土師質土器片	中世の水田開発関連遺構

要　約

赤迫遺跡は、日田盆地の東を区切る丘陵から盆地に向かって伸びる複数の尾根と谷に存在する遺跡で、これまでにも別の尾根上で古墳時代中期の土坑墓群が確認されている。

総合運動公園建設に伴い実施された今回の調査では、事業面積90,000㎡のなかでA～F区の6箇所で遺跡が確認され、今回はB～F区の調査について報告する。

尾根上に位置するB・E区では、古墳時代中期の土坑墓群や横穴墓群が確認され、これまでの調査と同様の状況が看取された。ただしE区では広い尾根上で子供用と思われる小さな石蓋土坑墓が1基のみという特異な在り方が確認された。またB区の土坑墓には鉄剣や刀子が副葬されており、この墳墓群の中心的人物の墓と考えられる。そのほかB区とC区では中世～近世墓や近世の所産と思われる牛馬等の骨が入った土坑が見つかり、このあたりがこの時代にふたたび埋葬域として意識されていたことがうかがえる。

尾根の間に入り込んだ小谷の最奥部にあたるF区では、意図的に谷を掘削したため池の痕跡が見つかり、中世の水田開発に関わる遺構と考えられる。その後の水がかり調査ではこの場所に堤が存在したとされ、中世のため池がほぼ同じ位置で堤として近年まで利用されていたようである。

赤迫遺跡
－Ｂ～Ｆ区の報告－

発行日　平成 29 年 3 月 31 日

編　　集　日田市教育庁文化財保護課

発　　行　日田市教育委員会
〒 877-8601
大分県日田市田島 2-6-1
TEL　0973-23-3111

印　　刷　株式会社インデバイス
〒 877-0076
大分県日田市亀川町 848-1